兄妹の想い

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄妹の想い

【Ｎコード】
Ｎ２９８８Ｏ

【作者名】
コノハ

【あらすじ】
兄、三宅五月
妹、三宅皐。
二人は愛しあい、好きあっている。
兄は家族として。妹は恋人として。いびつでおかしな二人はいつしか、非日常に巻き込まれていって……。
二人の想いが織りなす物語。

プロローグ

???暗い、部屋。

???テーブル、食器棚、キッチン、冷蔵庫……。ここがリビングだということはわかるが、休日の昼間だというのに、カーテンが閉め切られ、部屋の灯りは完全に消されている。真っ暗な闇の中、テレビの画面だけがこれでもかというほど光っていた。

???「……」

???「……」

???その光をじっと見続けている二人の男女。女のほうが、あぐらをかいた男の上にちょこんと座ってテレビを見ている。

???「……なあ、サツキ」

???男の方が、女に声をかけた。男の声は随分と若く、年も十代後半程度にしか見えない。

???「なんですか、兄様」

???サツキと呼ばれた女は、まだ幼さが残る声で男を兄と呼んだ。今まで見ていたテレビから兄に視線を移す。逆から見上げるような格好になったが、彼女は兄の姿を見れただけで、胸が熱くなって、鼓動が早くなった。

???「なんでこんなドラマ見るんだ？」

???二人が見ているのは、テレビドラマ。兄妹の二人が愛し合って、

幸せになる物語だった。
？
？「……こんな物語を見たら、したくなりませんか？」
？？「なにをだよ」
？？「恋」

？？短く、息を吐くようにサツキは言った。兄はそんな彼女に対して、大きなため息をついた。

？？「あのな。これは作り話だ。こんなの、現実にあるか」
？？「妹を愛する兄はいなくとも、兄を愛する妹はここにいますわよ」

？？サツキのそんな言葉を聞いて、兄はさらに肩を落とした。

？？「……はぁ。俺たち、兄妹だぞ？　？義理とか、腹違いとかそんなんじゃなく、正真正銘リアル兄妹。恋なんてどうすりゃできんだよ」
？？「どうすれば、などというものはありません。『好き』と思ったら、もう好きなのです」
？？「……わかってるけどよ」

？？兄は嘆息してテレビから視線をずらした。
？？妹……三宅　？皐は兄、三宅　？五月のことを愛している。それは家族が家族に向ける愛ではなく、恋人に向けるような、激しい愛欲だった。人から見れば嫌悪感さえ抱く想いだったが、ゴガツは受け入れていた。受け入れるだけで、応えはしなかったが。

？？「お前は、どう思ってるんだ？」
？？「彼らのことですか？」

？？サツキはテレビの中で愛を語らう兄妹を指さした。

？？「ああ」

？？「美しいとは、思いません。……うらやましいです」

？？「いやいや、そうじゃなくて、兄妹で恋をしてもいいのかどうか、ってことだよ」

？？ゴガツが聞くと、サツキはきょとんとした。

？？「なぜいけないのですか？」

？？「え？　？いや、そりゃ、だめだろうよ、近親はよ……」

？？「別に、兄妹は結婚できないというだけで、犯罪でもなんでもないのですよ？　？それでも、いけないことですか？」

？？なんでそんなことを聞くんだ、という風にサツキが言うので、ゴガツもなんでいけないのだろう、ということを考え始めた。

？？「……そこまでは、わかんねえ。まあ、いい悪いはどうでもいい。たとえよくても、俺はお前に恋しない」

？？「そうですか。いつか振り向かせてみせますわ」

？？相思相愛ではない、と面と向かって言われたにも関わらず、サツキは飄々としていた。恋しないだけで、ちゃんと家族として愛してくれているということを、彼女は理解しているからだった。

？？「……兄様、お風呂に入りませんか？」

？？「まだ昼間だぞ」

？？「……いいではありませんか。今日は早めに寝て、明日にそなえましょう？」

？？「明日なんかあったか？」
？？「学校がありますわ」
？？「いつもあるだろ」
？？「……一緒に入ってはくださらないのですか？」

？？二人は高校一年生。いくら兄妹とはいえ、普通ならば一緒に入浴などしないだろう。

？？「……仕方ねぇな」

？？しかし、妹が普通でないように、兄も普通ではなかった。彼は渋々ながらも頷くとサツキをどけて立ち上がり、風呂場に向かう。サツキはまるで飼い主に添い従う犬のように一歩後ろを歩く。

？？「……誘惑してくんなよ、サツキ」
？？
？？ゴガツは後ろを振り向かずに言った。

？？「襲いかかりそうになるからですか？　？別に構わないのですよ、いつでも襲っていただいても」
？？「俺ら兄妹だぞ？」
？？「別に、子さえ成さなければかまいませんわ」

？？あっさりとサツキは言い切った。いつもどおりの彼女にゴガツはため息をつくと、脱衣所の扉を開ける。洗面台が正面にあって、その右隣には洗濯機がある。その手前に洗濯物を入れるカゴが置いてあった。洗面台の左側にある風呂場の扉を開けると、ゴガツは湯を湯槽に張ろうと……。

？？「……うん？」

??不思議なことに、湯槽にはすでに、熱そうなお湯がたっぷりと張られ、風呂場は湯気で少し曇っていた。

??「どうかしましたか、兄様?」

??「……お前か?」

??「ええ、そうですわ」

??服を脱ぎながら、サツキはこともなげに答えた。確かにドラマを見始める前に洗面所へ行っていたような気がするが、まさか風呂をいれていたなんて。ゴガツはせいぜいトイレに行って、手を洗っていた程度にしか考えていなかった。

??「そもそもなんで風呂なんていれてたんだ?」

??「それは、元々ドラマを見終わったらお風呂に入るつもりだったからですわ」

??だからなんでだ、ということを彼は聞かなかった。聞いてもロクな答えが返ってこないだろうということが容易に想像ついたからだ。

??「兄様も衣服をお脱ぎになってくださいな。着衣のまま入浴するつもりですか?」

??「んなわけあるか。つかお前が脱ぐの早すぎんだよ。男の前だぞ?」

??「ええ。けれど、兄様の前ですわ。ならば何も問題ありませんわ」

??「そうかよ」

??ゴガツは肩を落とすと服を脱ぎ始める。サツキは全く羞恥心を

感じていないようだが、ゴガツは違う。あくまで兄妹だが、同世代の異性の前でもあるのだ。しかも、服を脱ぐところをジロジロと見てくる。恥ずかしいことこの上ない。

??「……サツキ、先入ってろよ」

??「わかりましたわ、兄様。待っていますわよ」

??意外なほど素直にサツキは先に風呂場に入っていった。ゴガツがセーターを脱ぎ終える頃には、シャワーのお湯がサツキの肌と風呂場の床を叩く音が聞こえてきた。

??「……ったく」

??ズボンに手をかけながら、ゴガツは毒づく。昔は普通の兄妹関係だったはずなのに、いつから、いつからこうなった？

??わかりきっていることを、彼は心中で疑問に思った。その理由はわかっている。それでも、もうまともな兄妹関係に戻れるとは、到底思えなかった。

??「サツキ、入るぞ」

??「ええ、どうぞ兄様」

??シャワーの音が止んだのを見計らって、ゴガツは風呂場の扉を開けた。

??二人の兄妹関係が狂った原因。それはたとえゴガツが知っていて、解決する方法がわかっていたとしても取り除くことはできない。

??なぜなら、原因を取り除ける可能性を持った唯一無二の存在は、すでにこの世に亡いのだから。

??

第二話

??バカなことを考えている、とゴガツは自覚していた。今更、サツキが元に戻るなんてありえない。彼はそう考えている。

??シャワーを浴びたあと、二人仲良く一緒の湯槽に隣り合って入る。一般的な大きさしかない家の浴槽では、高校生の男女二人は少し狭い。密着こそしないで済む広さだが、二人の距離は限りなく近い。そんな状態で、サツキは朗らかに言う。

??「ねえ、ねえ兄様。私、兄様のこと好きなんです。愛しています」

??「俺もお前のこと好きだ。愛してる」

??例え同じ言葉でも、二人の意味は全く違った。サツキのは、恋人として、異性としての好き。ゴガツのはその正反対で、家族として、血を分けた肉親としての好き。

??想いを言葉にすれば全く同じだが、そのベクトルは天と地ほども違っていた。

??「私たち、相思相愛ですわね！」

??「違う」

??きっぱりと、彼は断言する。恋人としては好きではない。けれど家族としては愛している。ゴガツは妹にそう伝えることを忘れなかった。多少の誤解を生むことは承知で、ゴガツはサツキに『愛している』という。

??「うふふ、いつか、いつかきっと相思相愛になってみせますわ」

??「……俺はならんからな」

？？そうでも言わなければ、サツキがこうして笑っていることはないだろう。ゴガツに否定されれば、サツキを家族として愛する人間は、誰一人いなくなってしまう。それは、ゴガツもおなじだった。同じだからこそ、ゴガツは家族愛に飢えていた。サツキが彼に向ける感情を強めさせれば強めさせるほど、家族愛は薄れていく。そして、もし相思相愛になってしまえば、もう二度と、『家族』はいなくなってしまう。そんな恐れも、ゴガツがサツキの想いに応えない理由の一つだった。そして、絶対に応えてはならないと彼に決意させる原因だった。

？？「……兄様、私に欲情したりはしないのですか？」

？？急にとんでもないことを言われても、彼は動揺すらしない。

？？「しない」

？？「私は、今すぐにでも飛びかかりたい気持ちですわ」

？？「そうか。じゃあな」

？？浴槽から出ようとしたゴガツの手を、サツキが掴んだ。

？？「冗談ですわ。早まらないで下さいな」

？？「タチの悪い冗談言うな」

？？短くサツキを叱ると、彼は浴槽に肩までつかった。

？？「ふふふ、あしらわれてしまいましたわ」

？？冷たくされたというのに、サツキは嬉しそうだった。まるで、兄と話すだけで幸せであるかのように。

???「嬉しそうにすんなよ。Mかお前は」
???「兄様が望むなら、マゾヒストにもサディストにもなりますわ」
???「柔軟なことだなぁおい」

???皮肉めいた口調でゴガツは笑う。

???「ええ。いつか兄様に振り返っていただけたときに、夜の逢瀬ができないのでは、またフられてしまうかもしれませんからね」
???「お前の人生、俺だけか？」
???「ええ、もちろんですわ。私の存在は、兄様のためにあるのですわ」

???あまりにもきっぱりと即答するので、ゴガツは空恐ろしくなった。まさか、まさか。疑問を解消するために、ゴガツはある問いをサツキにぶつける。

???「……お前、もし俺が死ねるって言ったらどうするんだよ？」
???「死にますわ」

???本来なら答えに時間がかかりそうな問いを、サツキはあっさりと答えた。実感がないだけだ。ゴガツはそう考えて、次の問いをぶつける。

???「……もし、俺がお前に、誰かと付き合え、って言ったらどうするつもりだ？」

???卑怯な質問だということは自覚していた。けれど、ゴガツは妹の覚悟が、どれほど想いが強いのか、知りたかった。

??「私は兄様のためになるのなら、どのようなことでも躊躇せずに実行いたします。それが例え、どれほど外道な殿方の元へ嫁げというものであっても、従います」
??「……」

??サツキは表情を曇らせてそう答えた。もしかしたら、すでに何かの決意がゴガツの中にあるかもしれない。もしかしたら、例え話でもなんでもなく、自分は誰かと付き合わされるかもしれない。そんな不安を抱えながらでも、彼女は言った。
??先の質問も、何も考えずに答えたわけではない。サツキは質問に答えた瞬間自殺を命じられるかもしれない、と考えながらも答えたのだ。

??「……兄様、私に縁談の話でも、あるのですか？」
??「……？　？ねえけど、どうしてだ？」
??「いえ。なんでもないのです」

??自分が懸念したことを兄がまるで考えていないと知って、サツキは顔を綻ばせた。

??「私、いつでも覚悟はできていますので、欲情したのなら言ってくださいね」
??「はいはい」

??ゴガツは軽くあしらうと、風呂から上がる。サツキも今度は止めることなく、一緒に上がる。

??「では、兄様」
??「なんだ？」

？？サツキは両手にタオルを持ち、それをゴガツの方へ向けている。
？？自身の分、というわけではなさそうだ。彼女の腕にはもう一つタオルがかかっている。では、なんのためにサツキはタオルを持っているのか？

？？「兄様、拭きっこしましょう？」
？？「……しかたねえな」

？？ゴガツは苦笑すると、向けられたタオルを手に取った。

第三話

???ゴガツはサツキの頭を拭きながら、彼女に頭を拭かれている。ゴガツの表情は苦笑ぎみの仏頂面だが、サツキの表情は幸せそのものといったふうだ。ゴガツはかなり乱暴に拭いているのだが、サツキは全く気にせずに兄とのスキンシップを楽しんでいるようだ。

???「……お前、髪拭くだけでなんでそんなに幸せそうなんだ？」

???「他ならぬ兄様の髪ですもの。他人の髪でしたらこうはなりませんわ。そもそも、兄様以外の殿方とこのような状況になること自体、ありえませんわ」

???ほがらかな笑顔で嬉しそうに言うサツキを見て、兄は妹の将来が心配になった。

???小学生が父親と結婚したいと言うのとは違う、本気の恋心。こんな調子で将来まともな恋愛ができるのだろうか。

???「……将来どうすんだよ」

???「兄様の妾になりますわ」

???「冗談言うな」

???「本気ですわ。私が兄様と結婚できないことも、将来兄様が別の女性と婚姻することも充分承知して、その上で言っているのです」

???「……俺は浮気はしない。意味はわかるな？」

???「……はい」

???ゴガツの髪を拭くサツキの手が少し遅くなった。彼女は目に見えてしょんぼりとしている。絶対に振り向くつもりはない。そんな兄の決意を知ったのだ、無理もないだろう。

？？「……ほら、もう乾いただろ」
？？「ありがとうございます……」
？？早々に髪を拭くのをやめると、ゴガツは服を着るため自分の部屋に向かう。この家の二階には三つの部屋があって、ゴガツの部屋、サツキの部屋、寝室となっている。寝室が同じなのは、サツキが望んだから、ではなく、ゴガツが一緒がいいと言ったからだ。彼はとある理由により、一人で眠るのが怖いのだ。
？？「……ったく、サツキのやつ……」
？？本や教科書が散乱する自室で、ゴガツは愚痴を言いながら服を着る。
？？「どうやったら元に戻るかな……。いや、無理か……」
？？ふと、壁にかかった時計に目をやる。今の時刻は午後二時。まだ昼間。なのにも関わらず、二人は風呂に入り、今から眠ろうとしていた。
？？「……」
？？休日は眠るか出掛けるかの二つに一つ。それを二人は疑問にも思わない。どこかへ行く予定がないのなら、早々に眠る。それが二人にとっての日常だった。
？？「あ～眠ぃ」
？？寝間着に着替え終わると、あくびをしながら隣の寝室に入った。

？？「あら、兄様。お早いですのね」
？？「ああ、眠いからな。とっとと寝るぞ」
？？「ええ」

？？ゴガツが部屋に入ると、サツキはパジャマを着おわって布団を敷いているところだった。

？？「兄様、眠る前に快感に溺れていたら、悪夢を見なくとも済むかもしれませんわよ？」
？？
？？サツキの口調にからかいや方便を言っている雰囲気はなかった。毎夜悪夢にうなされる兄を、純粋に心配しているのだった。

？？「……かもな。でも、そのためには相手が要るな」
？？「そんなもの、私が」
？？「だから、しねぇって言ってんだろ」

？？ぴしゃりと言い切ると、ゴガツは布団に入った。兄に拒否されてしょげていたサツキも、同じ布団に潜り込んだ。サツキの目には、不安そうに丸められたゴガツの背中が見えている。

？？「……兄様、人間は眠る事をしなければ死んでしまいます」
？？「わかってるよ」
？？「けれど兄様は、眠る事が怖いのでしょう？」
？？「わかってるだろ？」
？？「……ええ。わかっていますわ。だからこそ、悪夢を見ないようにと」
？？「無理だよ」

？？サツキの恋心と、ゴガツの悪夢。この二つは全く違うものであ

るが、原因は同じであった。だから、サツキの恋心同様、ゴガツの悪夢はなくなることはないだろう。

？？「……俺はきっとこれからずっと、あの夢を見続けるんだよ

？？「兄様……」

？？「ほら、寝ろ」

？？まだ心配そうにしているサツキだったが、ゴガツはぞんざいに言った。彼女は不満そうな表情をありありと浮かべていたが、渋々眠ることにした。

？？二人はほとんど同時に目を閉じ、眠りについた。

第四話

?どこかの道、どこかの道路。いつかの時。彼、三宅五月は母親と父親と共に横断歩道で赤信号が変わるのを待っていた。
赤信号は進んではダメ。青信号は進んでもいい。
覚えたてのルールを頭の中で反芻しながら、信号が変わるのを今か今かと待っている。

「赤信号は進んじゃだめなんだよね、お母さん」
「ええそうよ、五月」
「よく覚えてたな。偉いぞ五月」

両親が褒めてくれる。それだけで、五月は幸せだった。サツキにも教えてあげないと。あいつ、まだ赤信号と青信号の違いがわかっていないから。
心の中で兄貴面をしながら、彼はあたりをキョロキョロと見回す。見れば、五月の横にある信号が赤信号になった。よし、そろそろこっちの信号が青になるぞ。
そう思いながら、五月はこれからのことを楽しみにしながら想像する。
デパートに行ったら、お手伝いして、おもちゃを買ってもらうんだ。サツキの分もねだらないと。あいつ、すぐ拗ねるからなぁ。

「お、青になったぞ。じゃあ、行こうか」
「うん！」

そう言って、彼は横断歩道を渡ろうと、一歩踏み出して……。

「だめっ！」

「え？」

急に、彼は母親にすごい力で引き戻された。尻餅をついて、呆然と両親を見る。どこか遠くで、車のブレーキ音が鳴り響いた。両親は笑っていた。なぜ笑えるのだろう？　ゴガツは今でもその答えがわからない。これから何が起こるのか知っているのに。これからどうなるのか、わかっているのに。

「五月、皐、愛してる……」

その声に覆い被さるように、どこからともなく白の乗用車がやってきて、両親のいたところを通り抜けていった。まだ幼かった五月は何が起こったのか理解できなかった。ただ、ようやくとまった車のフロント部分が赤黒く染まって、両親だったモノがあたりに散らばっていたことだけは、覚えていた。

「……あ……」

二人がいなくなった。どこか遠くへいってしまった。五月は幼い頭でそれだけを理解した。

「……お父さん、お母さん？」

答える人はいない。答えてくれるはずの人は、『どうしたの？』と言ってくれるはずの人間はすでに――

「……ひっ」

すでに、バラバラの肉塊に。

「兄様っ！」
「！？」
体を揺すられ、大声で呼ばれてようやくゴガツは目覚めた。
「……また、うなされてたか」
「ええ」
ゴガツはズキズキと痛いくらいに跳ねる胸を手で押さえつけた。その程度で鼓動が収まることはなかったが、焼け付くような心の痛みと、ざわつく気持ちはおさまった。
「……今、何時だ」
「午後九時ですわ」
「……六時間。まあまあ持った方か……？」
普段のゴガツは持って二時間しか眠れない。いくら眠りたくても、目覚めてしまうのだ。そして、目覚めたあとも、すぐ隣に誰かがいないと、夢と現実の境が曖昧になってしまう。だから、ゴガツはサツキが隣にいないと怖くて目を閉じることさえできないのだ。
「ですわね。疲れは取れましたか？」
「……いや、全く」
むしろ、眠る前より疲れた感覚さえする。寝汗のような冷や汗が止

まらないし、全身が鉛になったようなだるさも感じる。

「……兄様、冗談でもなんでもなく、お聞きください」

「なんだよ。快感云々言ったら怒るぞ」

「そうではないのです。私を抱き締めて眠りませんか？」

「……」

心配そうにゴガツの手を握るサツキに、邪な想いは感じられない。

「……わかったよ。シャワー浴びてくる」

「別にそんなこと……いえ、いってらっしゃいませ」

「ああ」

ゴガツは立ち上がると、フラフラになりながらも風呂場に向かった。

「……兄様」

ゴガツを見送ったサツキは、涙を一筋流した。毎夜のことだが、ゴガツのうなされ方は尋常ではなかった。ゴガツが何の夢を見ているのか、サツキは知らなかった。けれど、よほど残酷で辛い夢であることは、身を切り裂かれたようなゴガツの悲鳴をきけばわかった。

「兄様、お願いですから……」

良い夢を。

彼女はそう願わずにはいられなかった。サツキにとってゴガツは激しい情欲を向ける恋人であると同時に底なしの慈愛を向ける家族でもあった。たった二人きりの家族。サツキはその二つの感情を一つのもの考えていたが、今のサツキは兄の心配をする妹そのものだった。

「……」

悪夢を見るのはサツキも同じだったが、ゴガツよりは頻度は少なかった。なにより彼女にはゴガツと違って縋る相手がいる。サツキは恋人であり兄であるゴガツを想えば悪夢の記憶などすぐに吹き飛んでしまう。しかしゴガツには、そのような相手はいないはず。

「……流さんなら、可能性はありますか……？」

サツキは一人の少女を思い浮かべた。いつもゴガツのクラスで彼にまとわりついているクラスメイト、流　運。彼女なら、兄の心の拠りどころに……。

そこまで思って、サツキはかぶりを振った。そんなことになれば、ゴガツは流と付き合うことになるだろう。そうなれば、自分はいらない子になってしまう。そんなのは嫌だ！

サツキはいつも不安なのだ。家族がどこかへ行ってしまうのではないか。ふと気を抜けば家族がいなくなってしまうのではないか。生まれた時から二人きりのかぞくなのだ、仲良くしなければ……。

「……ただいま、サツキ。さ、眠るぞ」

「はい、兄様」

ゴガツがシャワーを浴び終わり、服を着替えて戻ってきた。サツキは一度、流した涙をごまかすために一度おおきくあくびをして、全ての不安と恐怖をなかったことにするために、無理やり笑顔を作った。

「さあ、兄様。眠りましょう？」

ゴガツはサツキを抱き締めて目を閉じた。家族の温もりを感じて、少しだけ悪夢への恐怖が薄れた。
サツキは抱き締められることで、先程の不安を忘れることができた。少なくともこうしている間は捨てられることなどないのだから。
歪にゆがんだ二人は、互いを感じて始めて、安心して目を閉じることができた。

第五話

翌日の朝六時。ゴガツは朝の日差しを感じて目が覚めた。目を開けると、すやすやと幸福そうに眠るサツキの顔が視界を埋め尽くしていた。日本人らしい顔立ちだが、目はくりくりと大きく、鼻はすっきりと通っていて、充分以上にかわいらしい顔をしている。

「……おい、サツキ、起きろ、朝だ」

「……むにゃ、に、にいさま……？」

サツキは薄目を開けると、驚いたように大きく目を開いた。

「に、兄様……夢は、大丈夫なのですか？」

今までサツキは兄のうなされる声で目覚めていたのだ。それが急になくなって、嬉しいような、戸惑うような。

「ああ。お前を抱き締めてたら、なんとかなった。これからも頼む」

「はいっ！」

サツキはにこやかに笑って答えた。彼女はこれから毎日、恋い焦がれた兄に抱き締められて眠れるのだ。何度も夢見た瞬間が起きがけに訪れたので、サツキは夢ではないかと疑いもした。

「では、兄様。今日も学業に励みましょうか」

「だな」

二人は立ち上がると自室で制服に着替えた。男女共にブレザー

の単純な制服だ。ゴガツは校則に反しない程度に着崩しているが、サツキはスカートをひざ下まで下げている。

「どうですか兄様？」

「似合ってるけど……下げすぎじゃね？」

毎日のことだが、ゴガツは一応聞いてみる。

「ええ。これでよいのです。慎ましく、しとやかに。私のことを見るのは兄様だけで充分ですわ」

つまり、サツキは学校で変な視線で見られないためにこんな文学少女のような制服の着こなしをしているのだ。

「……兄様がやめろとおっしゃるのなら、やめますが」

「……いや、そのままでいい」

上げろと言ったらまるで自分が変態になったような気になってしまうのは目に見えているので、ゴガツはそう言った。

「では」

「ああ」

鞄を持って、リビングに降りる。元々四人で暮らすための家なので、中々広い。カウンターで仕切られた向こうには、システムキッチンがあって、パントースターが台の上に置いてあった。サツキは世話女房のように朝食を準備する。パンを冷蔵庫から取り出し、トースターに入れて、スイッチをつける。その傍で、ゴガツは食器等の用意をする。皿を食器棚から取り出し、テーブルに置く。

「はい、焼けましたわ」
「おう、悪いな」
しっかりと焼きあがったパンを皿にのせると、ゴガツが取り出していたバターを塗る。
「では、いただきましょうか、兄様」
「おう。いただきます」
二人は手を合わせると、ゆっくりと食べ始める。おもむろにゴガツはテレビのリモコンを持つと、電源をいれた。ちょうど、テレビではニュースがやっていた。
『逢坂県東逢坂市の近郊で、十六歳頃と見られる女性の死体が発見されました。顔や全身に傷があり、警察は現在司法解剖をして身元の確認を急いでいます』
「……ふうん。結構近いな」
「残酷ですわね、兄様」
サツキは痛ましげな表情を見せながら、つぶやくように言った。
「残酷か？　そうでもないと思うけどな」
「顔の判別ができないほど壊されているのですよ？」
「……！　う……く」
血に塗れて肉塊のようになった少女を想像して、ゴガツは戻しそうになった。夢の中の両親と重なったのだ。
「だ、大丈夫ですか兄様！？　す、すみません、私、なんの

配慮もせずに無神経なことを……」
「き、気にするな。は、早く食って、学校行くぞ」
ゴガツは乱雑にテレビを消すと、無理やり口にパンを突っ込んだ。
「ごちそうさまでしたっ！」
「あ、兄様、お待ちになって……」
サツキが止めるのも無視して、ゴガツは歯を磨いて、靴を履いて外に出た。
「ちょ、ちょっと兄様っ！」
サツキもゴガツと同じ様に急いで食事をし、歯を磨いて彼を追いかけた。
まだ日も昇りきらぬ朝の住宅街を、ゴガツは早足で歩き、その後ろをサツキが不安そうに歩いている。二人の家から学校まではそう遠くない。十分もあれば着いてしまう。
「に、兄様、すみませんでした。今後はあのような話はいたしませんから、どうかお許しを……」
「……学校に行きたくなっただけだよ。お前のせいじゃねえ」
「しかし……」
ぴたりとゴガツは立ち止まった。サツキはまるで従者のように、彼の一歩手前で立ち止まる。
「しかし、じゃねえだろ。俺がいいって言ってんだよ」

振り返って、サツキに手を差し伸べる。彼女は出された手の意味が一瞬わからず、首をかしげた。

「ほら、手。仲直りだ」

「……はいっ！」

不安そうな表情から一転して、サツキは太陽のように明るく笑って、ゴガツの手をとった。

「兄様、今日は学校どういたしますか？」

「どうって？」

「サボったりしないのですか？」

「しねえよ」

手を繋ぎながら、一見仲良く見える二人は学校への道をゆく。

「そうですか。今日も六時間、近く兄様と会えなくなると思うと寂しいですが……」

「お前基本的に休み時間俺のところに入り浸りだろうが」

「そうでしたわね」

「いちいち冷やかされるこっちの身にもなれよ……」

「けれど兄様、兄様は私のクラスでは大人気ですわよ？」

「お前があることないこと吹聴しまわるからだろうが」

「あら、そうでしたわね、ふふっ」

「ふふって笑ってもごまかされねえぞ」

「うふふふふ……」

どこまでもすれ違った想いを抱え、二人は行く。

第六話

？？兄妹が通う高校は、ここ逢坂県でも一二を争う人気私立高校だ。進学率を重視する傍で、付属大学へのエスカレーターもあるという様々なニーズに応えられる学校だ。けれど、兄妹は一番近くの高校だったから、ここを進路に選んだ。住宅街のど真ん中に設置された校舎は、近くから通う生徒にとってはとても都合がいい。兄妹の自宅は校舎からみて東側にあり、東門からは校舎の玄関も近かった。

？？二人が東門をくぐると、茶色に枝が目立つ、桜並木が出向かえる。春には満開の花びらを咲かせ、新入生達を祝福する木々なのだが、この時期はただの木にしか見えない。

？？「兄様、後ろから人が来ています」

？？「おう」

？？サツキに言われて、ゴガツは振り返った。けれど、人の姿は見えない。

？？彼がそろそろ振り返るのをやめようとした時、葉の散り切った桜並木の間を早足で駆け、二人に近づく人影があるのを見つけた。

？？影はだんだん大きくなって、二人がよく知る姿になった。

？？「やあ、珍しく早いじゃないか、三宅兄妹」

？？「お前かよ、エセ魔法使い」

？？「おはようございます、流さん」

？？気軽な雰囲気で二人に話しかけてきたのは、腰まで届く黒の長髪と、茶色の瞳を持つ、美少年のような顔立ちの少女だった。彼女の名前は流　？運。自称世紀の魔法使いである。

???「エセはひどいな、三宅兄。私はエセではなく正真正銘の魔法使いだぞ？」
???「なら空飛んでみろ」
???「生憎、今は箒と魔力を切らしていてな」

???そうカラカラと笑う姿は、口調も相まってまるで少年のよう。女子の制服を着ていなければ、よく見知った兄妹でさえ、男と見間違えてしまうかもしれない。

???「……なら、流さん、箒と魔力があれば……空を飛べるのですか？」
???「もちろんだとも。……人を蘇らせることも、不可能ではない」
???

???ゴガツは彼女の言葉に顔をしかめた。

???「……へえ。生き返らせるってか？」
???「ああ。魔法を使いこなす私にとって、人の死など、楽に操れる！」
???「……っ」

???流は軽い気持ちで言っているのだろうが、ゴガツの方はそうでなかった。できもしないことをなんでもないことのように言いきる彼女に、恨みのような感情を抱く。

???「私は世紀の魔法使い。古今東西ありとあらゆる魔法を使える神にも等しい存在だ」
???「……っ。黙れエセ魔法使い」
???「だから、私はエセではないと」
???「黙れってんだ！」

??耐えきれずに、ゴガツは叫んだ。

??「……兄様」

??「生き返らせる？　?バカ言ってんじゃねえぞ。人は死んだらそれっきりなんだよ！　?生き返りも、蘇りもしねえ！　?空を飛ぶだの火を吹くだの言ってる分には俺は何にも言わねえがな！　?俺の前で、二度と死人を云々言うんじゃねえ！」

??ゴガツはひとしきり叫び終わると、踵を返して校舎玄関に向かった。サツキも戸惑いながら、兄に続く。

??「……すまなかった、三宅。もう二度と、君の前で死者蘇生ができる、等を言わないと誓う」

??彼女はゴガツの背に向かって謝罪の言葉を言ったが、彼が振り返ることはなかった。喧嘩別れをしたあとに玄関で出会うのはきまずいのか、流は二人の姿が玄関の中に入ってから、歩を進めた。

??「……そう簡単に、過去の遺恨は消えはしない、か……。失敗したな」

??流は誰にも聞こえないように何かをブツブツ呟くと、次の瞬間にはその場から消えていた。

??「……本当に、すまないことをした。許してくれ、五月……」

??彼女が次に現れたのは、玄関の前。ほとんど瞬時に移動したにも関わらず、彼女はごく普通に靴を履き替える。この学校はある程度歴史があり、そのため彼女や兄妹が使う下駄箱も、古びていている。下駄箱の扉の金具も随分と錆びている。

???「……私の配慮が足りなかった……。くそっ。何が魔法使いだ。私の愚か者め……」

???上履きに履き替えた彼女は、真新しい廊下を歩く。流は兄妹と同じクラスだが、彼女の足はクラスに続く階段を登らず、そのまま廊下を過ぎて行く。改築されたばかりの校舎の中を、彼女は保健室に向かって歩く。

???「おはよう、先生」

???「あら、おはよう流さん」

???保健室までたどり着くと、彼女は保健室の扉を開け、常任の先生に挨拶をする。先生は職員室にもあるような執務机に座り、この部屋の常連である流を迎え入れた。

???先生が座っている机の向こうにはカーテンがかかっており、その向こうには純白のベッドが二つ、設置されている。ベッドのすぐそばには体重計など、よく使われる器具が置いてあった。

???「今日は遅かったじゃない。どうしたの？」

???「少し手間取ってな。あの兄妹……今日も一緒だった」

???流は保健室の先生を通り過ぎ、カーテンの向こうにあるベッドに座る。

???「まったく。毎日のことだけど、そこは病人が横になる場所よ。夢見がちな魔法使いが座る椅子じゃないの」

???「ふふふ、わかっているさ、そんなこと。今日は少し傷心でな、休みたいのだ」

？？流はそのままベッドに倒れこむと、白い天井を見上げたまま、呟く。

？？「全く、私はバカだ。今もなお彼らを縛る記憶を……私は完全に忘れていたのだから」

？？「……それって、三宅さんのこと？」

？？流は一人で呟いていたつもりだったが、保健室の先生が聞いていたようだ。

？？「聞いていたのか？」

？？「こんなに静かなとこで呟けば誰だって聞こえるわよ」

？？「……そうか。なぜ、彼らだと思った？」

？？流は体を起こして、そばまで来ていた先生に聞いた。

？？「あなたのそばにいる『彼ら』っていえば……あの二人しかいないじゃない」

？？「……友達がいないことが災いしたか」

？？流は恥ずかしそうに目を伏せた。

？？「恥ずかしがることないじゃない」

？？「放っておけ。……それで、三宅兄妹だったらどうしたというのだ」

？？鋭い口調で聞くと、先生は憐れみのこもった表情になった。

？？「あの子たち、十年前の交通事故で亡くなった二人の子供でしょ？」

？？この、治安が比較的よいとされる逢坂市でほとんど唯一起こった死人が出る交通事故。大々的に報道され、遺された二人の周りは、かなり騒がしくなった。十年たった今でも、彼ら兄妹の近くにいる人間は、事故のことを忘れてはいない。

？？「交通事故、ね……」

？？「何かおかしかったかしら？」

？？「……いや」

？？流は訂正したい気持ちをおさえて、短く言った。

？？「確かに、三宅兄妹は十年前殺された三宅夫妻の息子、娘だ」

？？「……そうよね。まだ、忘れられないのかしら……」

？？忘れられるはずがない。流は心の中で呟く。何もかも部外者であるこの先生に何を言っても意味はない。彼女はそう考えているから、訂正もしなかったし、言いたいことも言わなかった。けれど、ひとつだけ、彼女が我慢できなかったことがあった。

？？「何を忘れるというのだ。両親の事故か？　？死か？　？それとも痛みか？　？……どれも無理だ」

？？十年前に母親が遠くにいってしまった魔法使いは、身を切るような切ない表情をしながら言った。

？？「……流さん、大丈夫？」

？？「大丈夫だ。大丈夫だとも。あの二人に比べれば、私など……」

？？兄妹と、流　？運。三人は同じような境遇の人間だった。

??

第七話

？？「それでは、兄様」
？？「おう、またな、サツキ」

？？改修して真新しくなった廊下で、二人は手を振って別れた。いつも一緒にいる兄妹だが、学校のクラスだけは違った。サツキは兄と一時とはいえ別れる事を惜しみながら、自分のクラスに入る。隣り合わせのクラスなのは、サツキとってせめてもの幸運だった。

？？「……ふう」

？？ためいき一つついて、ゴガツは自分のクラスの扉をスライドさせた。

？？「……」

？？教室の中には、どこにでもあるような朝の風景があった。挨拶を交わし合うもの、会話に花を咲かすもの、眠りこけるもの、一人で読書するもの。
？？男三人で固まって会話をしていたうちの一人は、ゴガツが教室に入って来たのを見ると、彼に駆け寄って、すっと片手をあげた。

？？「おっす、ゴガツ。今日はサツキちゃん一緒じゃないのか？」
？？「おはよう、昌。なんで一緒じゃなきゃいけないんだよ」

？？ゴガツは苦笑して自分の席に向かう。彼の席は窓際の一番後ろの席。そして、ゴガツに話しかけた男子ー千秋　？昌はその前の席だった。

??ゴガツが席に座ると、昌は自分の机の上に座る。
??「いいじゃん。可愛くて、器量もいい。勉強だって運動だってできるスーパーシスターじゃねえか。何を躊躇うってんだ？」
??「……お前、ドラマの見過ぎ。兄妹で恋とか、ありえねえ」
??うらやましそうに言った昌を、ゴガツは辛辣に一刀両断した。
??「……言い切るのか？」
??「当たり前だ」
??「妹の方はお前にベタ惚れだってのに？」
??「……」
??ゴガツは一旦言い返すのをやめる。教室を見回し、誰かの姿を探す。探していた人間がいないことを確認すると、彼は軽い口調で言う。
??「あいつのは恋愛感情なんかじゃねえよ。家族愛を勘違いしてるだけだって」
??「へえ。サツキちゃんは勘違いでお前に惚れて、勘違いで夜毎アタックしてくるって？」
??「ああ、そういうこった。あいつも大人ぶってても思春期だからな。恋に恋するお年頃、ってやつだ」
??両手をひらひらさせて、ゴガツは笑う。その首に、昌はがっしりとホールドするように手を回した。
??「なあ、五月。そのセリフな、惚れられてる本人が言っても鬱陶しいだけなんだよ。わかるか？」

?・?ゴガツが恐る恐る昌の方を向くと、彼はこめかみに青筋を浮かべながら薄ら笑いを浮かべていた。

?・?「わ、わかんねぇな……?」

?・?嫌な予感がして、ゴガツはそう嘯いた。

?・?「じゃさ、お前。俺にな、もしサツキみたいなカワイイ娘がいたとするよ」

?・?「おう」

?・?ゴガツは言われた通り想像する。昌のそばをいつもキープし、夜毎にその美しい体、熱烈な言葉で求め、求愛する。そして昌はそんな彼女を辛辣に袖にしているのだ。彼女は目に涙を溜めながら、それでも潔く身を引いている。そんな彼女を背に、昌は飄々と笑っている。そんな想像をすると、ゴガツは胸がドス黒い塊で溢れていくような感覚を覚えずにはいられなかった。

?・?「で、俺は言うわけだ。あいつは勘違いしているだけだ、ってな。どう思う?」

?・?「むかつく。うっとうしい」

?・?率直に、ゴガツは感想を言った。すると、昌は少しずつ回した腕を締め始めた。

?・?「だろ?　?だろ?　?鬱陶しいだろ?　?うぜぇだろ!?

?あんなにカワイイ娘に言い寄られて、袖にするばかりか挙句の果てに勘違いだって切り捨てやがって!」

?・?「痛、痛、痛いって昌!」

?:?:叫ぶゴガツを無視して、昌は尚も、ギリギリと軋む音さえ聞こえそうなほど力を込め続ける。

?:?:「い、いたいって……言ってんだろうがっ！」

?:?:ゴガツは思い切り力を振り絞って、昌の腕を振り払った。予想外に強い力だったので、昌はたじろいだ。

?:?:

?:?:「お、おい。冗談だぜ？　?:きれんなよ」

?:?:「切れてねぇっ！　?:というか今の流れおかしいだろっ！」

?:?:顔を真っ赤にして、ゴガツは叫ぶ。赤くなった理由は怒りではなく、昌に言いように言いくるめられた感覚を覚えて、恥ずかしいからだった。

?:?:「何がおかしいんだよ?」

?:?:「何もかもだっ！　?:兄妹で恋するのが前提ってのがそもそもおかしいし、いくら可愛いかろうが、あいつは俺の実の妹だっ！　?:何で近親者と恋に落ちなきゃいけないんだっ！」

?:?:叫び終わるころには、ゴガツははーはーと肩で息をしていた。一息で言ったため、疲れたのだろう。

?:?:「わ、悪かったよ。朝っぱらから叫ぶなよ」

?:?:「叫ばせたのは誰だよ……」

?:?:ゴガツはため息をひとつすると、疲れたような顔をして、机に突っ伏した。

?:?:「どうしたんだよ？　?:昨日寝なかったのか?」

？？「いや？　？久々の快眠だった。十年ぶりぐらい？」
？？「よく言うよ……」

？？ゴガツの言っていることが冗談でもなんでもなく、紛うことなき真実であるなど、昌には考えもつかなかった。ゴガツが十年前起きた事件の遺族であることは彼も知っていたが、日々の生活でそれを意識することはなかった。学校でのゴガツが普通の人間であり、昌が気のいい人間であるから、このような関係を結べているのだ。

？？「……はっ。やっぱりお前にはお見通しか、昌」
？？「おおよ。普通に考えて、十年もまともに眠れねェって、ありえねえよ」

？？受け取る人間によっては辛辣とすら取れる言葉に、ゴガツは。

？？「だよな。冗談だよ、冗談」

？？ゴガツは冗談めかして、普通に笑ったのだった。

第八話

？？「おはよ、サツキちゃん」
？？「おはよう、アリス」

？？サツキは教室に入って真っ先に、唯一の親友である波中　？有栖と挨拶を交わした。廊下側の一番前の席である彼女は、ふとした縁からサツキと言葉を交わすようになり、いつしか親友となっていた。サツキはアリスの後ろの席に着くと、鞄を横に掛けて、朝の喧騒に負けないくらいしっかりとした声で話しかける。

？？「アリス、今日の調子はどう？　機嫌悪いみたいだけど、またお兄さんと喧嘩でもした？」
？？「ううん。お兄とはうまくいってるんだけど……」
？？「けど？」

？？サツキは真剣に話を聞いている。親友の悩みなら、解決してあげたいと思っているからだった。

？？「けど、お父さんとお母さんが……」
？？「……」

？？それからしばらくアリスは自身の家庭問題をサツキに話すが、話されている本人は虚ろな目をしたまま固まっていた。なんの反応も示さないし、もしかしたら意識も失っているのかもしれない。

？？「……サツキちゃん？　？聞いてるの、サツキちゃん？」
？？「……えっ？　？な、何が？」
？？「はあ。……そういえば、サツキちゃん、禁句があったんだよ

ね」

??目の前で親友の意識が無くなったのにも関わらず、アリスは冷静に呟く程度の反応しかしなかった。

??「き、禁句？」

??「あー……なんでもない」

??サツキは、ある言葉を聞くと、極度の拒否反応を示し、しばらくの間あらゆる感覚をシャットアウトしてしまうのだ。なぜそんなことになったのかを、六年前に転校してきたアリスは知らなかった。サツキのことをもっと知りたいと思っている彼女は、そのことについて聞こうと思うのだが……。

??「……お兄がね、お兄の奥さんと喧嘩したの」

??「そうなの……。家族が喧嘩するのって、見てると辛いよね」

??「……うん、そうだね」

??十九歳の兄に奥さんがいる。そんな嘘をすんなりと信じてまで禁句を聞くまいとするサツキの様子を見ていると、とてもではないが聞けるものではなかった。

??「……どうすれば、二人は喧嘩をやめてくれるかな……？」

??相談する一方で、サツキの心配をする。板挟みなアリスだが、嫌な気分はしなかった。なぜなら、サツキは禁句さえ言わなければ普通に、いや、普通以上に良い案を出してくれるのだから。疎ましく思ったりできるはずがない。周りの級友は、そう思わないようだが。

？？「そう、ね。……ううんと……。喧嘩、止めるように努力してみた？」
？？「……」
？？アリスは力無く首を振る。
？？「そう。きっと、アリスの兄様とその奥さんとの喧嘩は、激しいんだね。……だったら、好きにさせてみたら？」
？？「え？」
？？思わぬアドバイスに、アリスは思わず声をあげた。その反応をサツキは予想していたのか、心配ご無用、と言わんばかりに微笑んだ。
？？「喧嘩するのって、やっぱりお互い何か言いたいことがあるから、するんだよ。雨降って地固まる、って言葉があるくらいなんだし、喧嘩するのは悪いことじゃないんだよ。あんまり頻繁にするんだったら考えものだけど、今はそったしておいてあげたら？」
？？「……い、いいのかな、それで」
？？不安そうにアリスが聞くと、サツキは彼女を安心させるように頷いた。
？？「うん、いいんだよ。それでも気になるんだったら……そうだね、周りにある危ない物を片付けといたら？　？怪我だけは、しないようにね」
？？「……うん」
？？頷いたアリスに、さきほどまでの不安そうな表情はなかった。

？？「……それで、サツキの調子はどう？」

？？アリスは苦笑しながら聞いた。するとサツキは急に明るい笑顔になって、饒舌に口を開いた。

？？「兄様、昨日ようやくぐっすりとお眠りになったの！　？私、兄様の悲鳴で目覚めなかった朝なんて初めてだった！」

？？「……そうなの。よかったね」

？？また惚気を聞かされる、と覚悟していたアリスは、胸が暖かくなるのを感じた。常日頃、ゴガツとの真偽交えた惚気を聞かされていた彼女は、ゴガツが夜眠れない事も、知っていた。それが解決されたというのだ、サツキにとっては嬉しくて仕方ない。それがわかるから、アリスも自分のことのように嬉しくなるのだ。

？？「それにそれに、これから毎夜、兄様に抱いていただけるの！　？これがもう嬉しくって嬉しくって！」

？？「なっ……！」

？？驚いて絶句したのは、なにもアリスだけではなかった。朗らかに叫んだ内容があまりに内容だったので、聞き付けた周りのクラスメイトも何事かとサツキの方を見つめた。

？？「……あれ、みんなどうしたの？」

？？「ど、ど、どうしたのって……。あ、あなたたち、兄妹……よね？」

？？「ええ。でなければ兄様を兄様と呼ぶ事もないよ？」

？？「……だ、抱いてって、毎夜……？」

？？「そうだよ？　？何か変なことでもある？」

??サツキはゴガツのこと以外は正直言って、どうでもいい。唯一の例外がアリスなのである。だから、兄に抱かれると声高に言うのが他人にどう取られるか、など全く気にしていないのだ。

??「へ、変かどうかで言えば……変だけど、さ。同意の上だよね？」

??「もちろんです。兄様に許可は取りましたわ」

??「あ、そっちが取る側なんだ……じゃなくって！　？……避妊はしたの？」

??最後の部分はサツキの耳元で、誰にも聞こえないように言った。それを聞くと、サツキは顔を真っ赤にして取り乱した。

??「え！　？ひ、ひに……！？　？な、何変な想像してるのよアリス！　？私はただ兄様に抱き締めてもらうだけで……！」

??それから先はほとんど言葉にならなかった。顔を羞恥で紅くして、いやいやと体をひねる。実際にそういう関係になだれこめた上での質問ならともかく、そうでないのにアリスに勘違いされた、ということがサツキを茹でタコのようにした。

??「……え」

??今度呆然と呟いて赤くなったのは、アリスだった。さっきサツキがなんともない顔をしていたのは、やましい意味が全くなかったからで、勝手にやましい想像をしたのはアリスの方なのだ。

??「そ、そういう意味だったの？　か、勘違いするような言い方、しないでよ」

??「か、勘違いしたのはアリスでしょ？　？わ、私が、兄様とな

んて、夢のまた夢……」

??紅くして照れるサツキは、本当に恋する乙女だった。

??「……とりあえず、夢見てはいるんだ」

??「当たり前です！　?私は、兄様のことが大好きなのですから！」

??いつものように兄への愛を叫ぶサツキだった。

??「……恋に恋するお年頃……ってわけじゃ、なさそうね」

??その様子を見ていたアリスは、しみじみと呟いた。

??「何か言った、アリス?」

??「なんにも。幸せそうでなにより、って思っただけ」

??「ありがとう、アリス！」

??「……はあ」

??本当、ゴガツさえ絡まなければ普通のいい子なんだけどなぁ……。アリスはしみじみと、嬉しそうに顔をほころばせているサツキを眺める。

??「ああ、兄様に早く逢いたいなぁ……！」

??サツキは目の前にいる親友そっちのけで、兄への想いを語る。

??

??「……」

??なんでこの子はこんなにもお兄さんのことを好きなんだろう?

?わっかんないなぁ。

??同じ兄がいるアリスは、それだけはどうしても理解できなかった。

第九話

？？「やあ、ゴガツ、サツキ、昌。喜べ、会いに来てやったぞ」

？？昼休みになって、ゴガツ、サツキ、昌の三人で話していると、教室の扉を魔女の格好をした流が開けた。黒の三角帽子に、漆黒のローブを羽織り、両手はローブの中。どう考えても学校でする格好ではない。

？？「そうかい。どうもわざわざご苦労さん」

？？「こんにちは流さん」

？？「よっす、流」

？？三人は珍妙な格好をしている流を気にする事なく受け入れる。他のクラスメイトも、毎日の事なので慣れたものであった。視線を一度流に向けると、特に驚く事もなく、各自の生活に戻った。

？？「揃っているな、三人とも」

？？「どうされたのですか、流さん」

？？流は基本的に保健室登校だが、教室に来ないわけではない。来る時は決まって、魔女の格好をしているが。

？？「いや、どうもしない。久しぶりに君らがいる教室に来たくなってな」

？？「へえ、意外だな！　？流、俺狙いだったの？」

？？「君ら、と言った。特定の人物を指した覚えはない」

？？軽く流された昌はしょんぼりとしたが、すぐに気を取り直して

口を開く。

??「じゃあさ、ゴガツ狙いか？」

??「だから、特定の人物に会いにきたわけではないと言っている。聞き分けてくれ」

??流は同じように返したが、昌の反応は違っていた。

??「へへへ、お前狙いでもないってよ。残念だったな」

??「いや、良かったよ、本当に」

??喜ぶ昌だったが、彼が期待したような反応をゴガツから得られず、少し不機嫌そうな顔になった。

??「何がよかったんだよ？　？お前のこと眼中にねぇって面と向かっていわれたんだぜ？」

??「そうだな。だから良かったんだよ」

??ゴガツはすぐ隣にいるサツキにチラリと視線を向けながら言った。サツキはなんでもないように流のことを見ているが、その内心何を考えているのかはわからない。もしゴガツ狙いだ、など冗談でも言おうものなら……どうなっていただろうか。

??「兄様のことを狙っているわけではないのですね？」

??「何度同じことを言わせる。私はこうして友人達と過ごす何気ない時間が好きなだけだ。個人に思い入れはない」

??それもそれで変な話だが、サツキにとってはどうでもよかった。ライバルが増えなくて済んだ、と内心胸を撫でおろす。

？？「そうかよ。ってか、その格好いい加減にどうにかならないか？」
？？「ならんな」
？？流は即答する。
？？「なぜですか？　？その格好、その、少し教室の雰囲気にあっていないと言いますか……」
？？「中々手厳しいな、三宅兄妹。だが、この服は私にとって、家族みたいなものなのだ。少しとやかく言われたぐらいで脱ぐことはできんし、おいそれと手放すことはできん」
？？大きな三角帽子の縁を指でつまみながら、流はにやりと笑った。絶対にスタンスを変えるつもりはないという意思表示らしい。
？？「ならなんで登下校は制服なんだよ」
？？「もし校門で抜き打ち検査を開始した風紀委員に捕まったらコトだろうが。没収されるわけにはいかんのに」
？？
？？教師達を警戒しないあたり、もしかしたらもう話は通してあるのかもしれないと三人は思った。
？？「そうですか。その格好だと、魔法使いと名乗るのも違和感ありませんね」
？？「だろう？　？何事も外見から、だ。この服を着ているときは魔法の成功率も上がっている気がするしな」
？？「ははは、じゃあちょっとやってみてくれよ！」
？？からかうように昌は言ったが、流は冗談と取らなかったようだ。

？？「わかった。……そうだな、こんなのはどうだ？」

？？流はローブから片手を出すと、手のひらを上にして昌に差し出した。

？？「……？」

？？昌が首をかしげると、流はイタズラをする時の子供のような表情になった。人さし指と親指を擦り合わせ音を出すと、流の人さし指からライターが出すような淡い炎が揺らめいた。

？？「はぁ～……」

？？驚いたのは昌だけではなく、ゴガツとサツキも流が見せた『魔法』に驚き、目を見開いている。

？？「……ま、こんなものだ」

？？流が手のひらを閉じると、シュボッと音がして炎が消えた。

？？「す、すごいですね、流さん」

？？「いや、こんなものは手品の領域だ。まだ、魔法の本領ではない」

？？「謙遜かよ。にしても、やるな、流」

？？三宅兄妹の評を聞いて、流は顔をほころばせる。

？？「へえー。すげえじゃん、流。惚れたかも」

？

？？昌はからからと朗らかに笑い、流を褒める。

？？？

？？？「……戯言を。だが、ありがとう」

？？？

？？？言葉ぶりこそ単調だったが、流の顔は耳まで真っ赤だった。

？？？「……素直じゃねえ奴」

？？？四人の中で、楽しい時間が過ぎて行く。

第十話

？？「起立！　？礼！　？さようなら！」
？？「さようなら」

？？委員長の声と共に、放課後になった。ゴガツは教室の隅の席で、帰宅の準備を進めていた。

？？「兄様！　？さあ、私達の家へ帰りましょう！」

？？鞄に筆記用具等を詰め込み終わる頃に、サツキが隣のクラスから乗り込むようにしてやってきた。

？？「早えな、おい」
？？「何が早いものですか。私はこの時が来るのを今か今かと待っていたのですよ！？」
？？「そりゃ時間も長く感じるだろうよ……」

？？過ぎろ過ぎろと思えば思うほど、時間はゆっくりと過ぎて行く。時とはそういうものだ。

？？「ま、早く帰りたいのは俺も同じだ。帰るぞ」

？？鞄を肩に担ぐと、ゴガツはサツキを連れて外に出た。

？？「兄様兄様、今日も学校はとてもとても楽しかったですわ」
？？「そうか。俺はそうでもなかったがな」

？？終始笑顔なサツキと、ぶっきらぼうに言葉を交わすゴガツ。こ

の二人の下校風景はクラスの風物詩になるほど、微笑ましいものであった。

？？「そうですか……。明日は楽しめると良いですわね」

？？「……だな」

？？返事をしながら、ゴガツは思う。昌や流と話すのは楽しい。けど、学校を楽しいと思うことはないだろう、と。

？？「……なあ、サツキ、お前、学校の何が楽しいわけ？」

？

？？ふと気になって、ゴガツは聞いた。何かにつけてゴガツと意を同しようとするサツキが、なぜ学校に関しては意見が違うのか。それを知りたかったからだ。

？？「え？　？え、ええっと……。す、全てですわ。授業、先生方、学友……そして、休み時間、兄様とお会いできる至福のひと時。これにつきますわ」

？？「……そっか」

？？ゴガツは何かひっかかったが、気にしないことにした。別段、重要なことではないと思ったからだ。

？？「……流は？」

？？

？？保健室の前を通っても、彼女の姿が見えないので、ゴガツはつい立ち止まって振り返った。

？？「さあ。もう帰られたのではありませんか？」

？？「……かも、な」

??何か寂しそうな表情を保健室のドアに向けるゴガツ。そんな彼を、サツキは複雑な表情で見ていた。彼女は、ゴガツには心の支えが必要だと考えていた。それはゴガツの夢に現れて、悪夢を振り払ってくれるほど、ゴガツが焦がれる人物でないといけないのだ。サツキはその支えになれないことを自覚していた。そして、今一番その支えになれる可能性がある女性は、逢坂高校の魔法使い、流　?運のみだった。

??「……行こうか、サツキ」

??「はい！」

??サツキの物憂げな表情は、ゴガツが振り向くと瞬時に花のような笑顔に変わった。

??「……ったく、俺、下駄箱も嫌いなんだよ。なんでいちいち靴履き替えなきゃいけねぇんだよ。なあ？」

??「ええ、そうですわね。上履きはデザインが宜しくないので苦手ですわ」

??二人は靴を履き替えながらも仲良く会話する。履き替え終わると、玄関から外に出て、帰路についた。まだまだ校内の人通りは多く、二人はその中に交じり、隣り合って歩く。

??「兄様、家に帰ってからどういたしますか？　?私、できれば兄様と」

??「それ以上は言うな。誤解される」

?

??サツキが何を言いたいのかがわかったのか、ゴガツは先回りして止めた。するとサツキはぷくりと頬を膨らませてむくれた。

？？「どうしてですか？　？私が兄様に対する愛を叫ぶのが、そんなにおかしいでしょうか？」
？？「世間的にはな」
？？「世間など。もはや私には遥か遠いものです」
？？「……だな」

？？ゴガツは遠い空を見ながら言った。両親がいて、家に帰ると暖かい食事が用意してあって……。そんな世間一般の『幸せ』は、もうゴガツには遠い世界のことだった。

？？「……兄様？」
？？「ん？　？……ああ、なんでもない」

？？ゴガツは少し目を細めて言った。サツキは幸せそうだった。両親のことを忘れて、自分以外の何も考えないようにして……。歪んではいるが、サツキは確かに幸せなのだ。ゴガツは、そんなサツキが羨ましかった。

？？「なんでもねぇよ。サツキ、今幸せか？」
？？「もちろんです！　？兄様と同じ世界で、兄様と同じ国で、町で、家で過ごし、兄様とおしゃべりできるのですから！」
？？「……そうか」

？？幸せなことでなにより。そう言おうとしたときだ。一人の男が、二人の前に立ち塞がるように現れた。二人はその姿をみると、ぴたりと立ち止まる。彼はスーツをぴっちりと着こなし、端麗な容姿をしているが、雰囲気はやつれ、果てしなく暗かった。この世の不幸全てをその身に背負っているような……そんな重い雰囲気。
？？そんな人間が現れたのにも関わらず、三宅兄妹の視線は冷やや

かだった。軽蔑すらも通り越し、目の前にいるのモノが存在することすら許さない……そんな攻撃的な視線を、現れた男に向ける。

???「なんの用だ」

???「いえ、特に用というわけでは」

???「なら、失せろ」

???それだけ言って、ゴガツは彼の横を通り過ぎようとした。

???「……本当に悲しいのですか？」

???「……あん？」

???不意にかけられた言葉に、ゴガツは怒りを露わに立ち止まった。もし今第三者がこの場を見れば、間違いなく警察を呼んだだろう。それ程まで、兄妹が男に向ける敵意は大きかった。だが、幸か不幸か今現在三人がいる道に人通りはなく、一目もない。兄妹が住む家の近くは、この時間帯人通りが少ないのだ。

???「……悲しいか、だと？　？戯言が聞こえたようだが、なんか言ったか？」

???「ずいぶんと楽しそうに学校に通っているのですね、と思いまして。妹さんも、幸せそうだ」

???「……で？　？それで、サツキが幸せだったら、どうだってんだよ」

???男は申し訳なさそうに、口を開いた。

???「……慰謝料の支払いを、終了させていただきたいのですが」

???「……殺してやろうかクソが」

？？ゴガツは横にいる男を思いきり殴ろうとして……それを、走ってきたサツキに止められた。

？？「サツキ！　？止めんな！　？こいつ……一発殴らせろっ！」

？？「ダメです兄様！　？この方を殴ってはなりません！　？この方、おそらくすでに兄様を嵌める手立てを……！」

？？「！」

？？サツキが言っている意味に気付いて、ゴガツは拳を下げた。男は少し残念そうな顔をした。

？？「殴らないのですか？　？残念」

？？「……てめぇ、いつから俺らにそんな生意気な口聞けるような身分になったんだ、ああ！？」

？？ゴガツは心の底から湧き上がる悪意を隠そうともしなかった。

？？「別に、身分だどうだの関係ないでしょう？　？私は大人、あなたは子供です。私がお金を振り込まなければ、明日食べるご飯もないくせに」

？？「そうならざるを得なくしたのは誰だよ……！」

？？「私です。……それがどうかしましたか？」

？？「このっ……！　？今日はずいぶんと大きくでるじゃねえか、この殺人鬼！」

？？兄妹の目の前にいる、スーツ姿の男。

？？彼は、嘉蓋　？豊。十年前に起きた事故の……加害者だった。

第十一話

？？「殺人鬼とは言い草ですね。あれは事故でした。そうでしょう？」

？？「飲酒運転と居眠り運転しといて言うことか？」

？？閑静な住宅街、三宅家の自宅前でゴガツとサツキ、そして嘉蓋三人は言い争いをしていた。嘉蓋は二人を家に帰れないように、玄関を背にして三宅兄妹に立ちはだかっている。

？？「あれは事故。それは、裁判でも認められたでしょう？」

？？「懲役九年食らったクズが偉そうに吠えんな」

？？言いながら、ゴガツは苛立たずにはいられなかった。なぜ嘉蓋がここにいて、しかも帰る邪魔までしてくるのか。ゴガツにはそれが全くわからなかった。

？？「……どいてくださいますか。早く家に帰って眠らないといけないのです」

？？ゴガツの前では常に笑顔を振りまいているサツキも、嘉蓋に敵意のような感情を抱いていた。

？？「幸せそうですね。私はそうでないのに」

？？「ええ、私は幸せです。……それが、なにか？　？あなたが幸せであることと、私が幸せであること、一体なんの因果があるのです？」

？？嘉蓋はサツキの言葉を嫌味だと受け取った。実際はそうでなく、

ただ感じたことを、感じたままに言っただけなのだ。

??「……私が心血注いで稼いだお金で暮らしているくせに、よく言う……」

??「てめえが事故起こさなきゃ何の問題もなかったんだろ？　？自業自得だ、クズが」

??　一切の容赦を抜きにして、ゴガツは言う。サツキはなぜ兄が嘉蓋に敵意を向けているのか、なぜ自分が嘉蓋に嫌悪感を抱いているのかわからなかった。サツキは兄に対する疑問はともかく、自分に対する疑問を、兄と同調しているためだと考えた。兄の感じていることを感じとったから、こんな感情を抱いているのだ。そう考え、それを真実だと思い込んだ。

??「子供が大人にそんな口を聞くもんじゃない、と教えてもらわなかったのか？」

??「教える人間を殺した奴に言われたかねぇな」

?

??ゴガツはサツキのことを考慮し、禁句にあたる言葉を意図的に避けて嘉蓋に言う。

??「あれは仕方なかったのだ。わかるだろう？　？連日連夜の接待疲れに加えて、まだ前夜の酒が抜け切っていなかったのだから」

??「……百歩、いや、億万歩譲ってそう思うことは許してやる」

??ゴガツは怒りとも悲しみともつかぬ表情をしながら、サツキに抑えられた拳を握りこむ。

??「でもな、それを俺らに言うなよ……。もし、サツキが止めてくれなかったら、お前を殺してるところだったぞ……？」

？？もうそれ以上なにも言わず、消えてくれ。懇願に近い思いを視線に込めながら、ゴガツは言った。対する嘉蓋の反応は、彼の思惑に大きく反するものだった。

？？「別に、殺してくれてもいいのだぞ？　？そうすれば私は晴れて解放され、今度はお前が、私と同じ道を歩むのだからな。……それに、私の、私だけの人生は十年前すでに死んだ」

？？「あん？」

？？ゴガツは訝しげに聞いた。

？？「十年前のあの日、私の全てが終ったあの日。毎日見舞いに行ったというのに減刑どころか刑を重くしろ？　？なにを考えているのか。これだから子供は」

？？「……」

？？もしこの場にサツキがいなければ、ゴガツは嘉蓋に襲いかかっていただろう。嘉蓋のあまりな言い草に、ゴガツの怒りは怒りを通り越し、別の何かに変わりつつあった。もっと明確でもっと鋭角でもっとも醜悪な……殺してやる、という殺意。

？？「私の生活をまるで考えず、ただ重い刑罰を、と叫んでくれたおかげで私は懲役九年！　？その上民事裁判でも負けてお前たちに金を払い続けなければならなくなった！」

？？「全部てめぇのせいだろうがっ！　？勝手な理屈こねて、てめえは何がしたいんだっ！」

？？ゴガツが怒鳴ると、嘉蓋はにやりと笑った。嫌な、悪意に満ちた笑顔だった。サツキは嫌な予感を感じ、ゴガツをかばう様に前に

出た。

??「だからね、私は決めたのだよ。適当に挑発して、君がこちらを殴って適当に裁判起こして、慰謝料の話をなしにしよう、ってね。でも、お前は乗ってくれなかった。だから……」

??壊れた笑顔のまま、嘉蓋は片手をすっとあげた。

??「だから、お前たちには死んでもらうことにしたよ」

??「!?」

??ゴガツは頭に強い衝撃と痛みを感じて、後ろを振り向いた。すると、十二歳ぐらいであろう男の子が、鉄バットを持って立っていた。彼が持つ鉄バットの先には、赤い血液がついていた。

??「……!　?てめえっ!」

??思いきりその男の子を殴り飛ばすと、後ろを見る。すると、サツキが妙齢の女性に抱えられ、どこかに連れていかれようとしていた。サツキは気を失っているようで、ピクリとも動かない。

??「ま、待ちやがれ!　?てめらどこに行く……!」

??サツキに追いつこうと駆け出したゴガツだったが、もう一度、今度は先程と比べ物もならない強さで頭を殴られ、ゴガツは地面に膝をついた。

??「はあ、はあ……。ヨシキ、こいつも連れていくぞ。山奥で始末して……」

??「父さん、人が!」

？

？？会話が聞こえるが、ゴガツにはその意味が理解出来ない。頭が霞がかったようにぼやけ、意識が消えかけていた。

？？「ちっ！　？おい、行くぞ！」

？？「で、でも！　？やるんならとことんやらないと！」

？？「今はそんなこと言っている場合じゃない！」

？？その会話を最後に二人は駆け出し、あっという間にゴガツの視界から消えてしまった。

？？「……さ、つき……」

？？ゴガツの意識が完全に途絶える寸前に彼が思い描いたのは……。

？？父と母。自分と妹とが仲良く暮らして、幸せに過ごしている日々だった。

？？その夢の映像が途絶えると同時、ゴガツは意識を失った。

第十二話

?:?:夢、夢、夢。ゴガツは夢を見ていた。珍しく、悪夢ではなく幸せな夢。場所は自宅で、それ以外のことはわからない。わかる必要はない。重要なのは夢の場所ではなく、誰が出てくるか。

?:?:「お兄ちゃん、とっとと起きなよ。まーたお母さんが怒るよ?」

?:?:「ん?　?……ああ、そうかも」

?:?:夢の五月はどうやらリビングで寝ていたようだ。敬語を使わない皐は、キッチンに立っている女性を指さしながら乱暴に五月を起こした。

?:?:「こらこら、皐。あんまりお兄ちゃんに乱暴しないの。せっかくの女の子が台無しよ?」

?:?:「はん!　?:ほっといてよ、お母さん!　?:てか、今時女の子らしく、とか流行らないよ?　?:ってか、男女差別だ!　?:とか叫ばれちゃうよ?」

?:?:皐は腕組みしながら憤慨した。すると、キッチンに立っている女性は少し悩んだ様子を見せたあと、落ち着いて言った。

?:?:「そう。じゃあ、お兄ちゃんに乱暴しないの。わかった?」

?:?:「う……。わかった。ほら、とっとと起きて!」

?:?:皐は勢いよく五月を起こすと、無理やりまぶたをこじ開けた。

?:?:「や、やめろっ!?　?:お前なにすんだよ!?」

?:?:「起きないお兄ちゃんが悪いんだからね。ほら、早くご飯食べ

て学校行きなよ」

？？皐はテーブルにつくと、並べられている食事をつつき始めた。普段食べているような質素なものではなく、色とりどりの野菜や、しっかり焼かれた肉など、朝食にしては妙に豪華な食卓だったが……五月は、それを疑問に思うことなく、皐と反対のところに座る。

？？「てか、お前学校は？」

？？「行くに決まってんじゃん」

？？「じゃあなんで、俺を先に行かそうとすんだよ」

？？すると皐は不機嫌そうな顔をしたあと、五月に箸を突きつけて言った。

？？「なんで一緒に行かなきゃいけないの！？　？お兄ちゃんと一緒に登校したら、変な誤解生むでしょうがっ！　？近親相姦変態兄妹とか呼ばれるのは絶対やだからね！」

？？「……お前、俺のこと嫌いなのか？」

？？「あのね！　？いくら家族として好きでも、恋愛とは全然別！　？学校で変な噂立てられて、もし彼の耳に入ったら……ああっ！」

？？嫌な想像をしたのか、皐は身悶えした。

？？「……好きな奴でもできたのか？」

？？「悪い？」

？？「……いや、べつに？　？お前が好きになる奴って、どんなのかなって」

？？

？？嫉妬してるのか、と思った皐は、突き放すために一語一語を強調して答えた。

？？「お兄ちゃんとは、ぜんっぜん、違うタイプの、人ですよ～だ！　？何一人前に兄貴面してんだか！　？歳変わらない癖に！　？ふんだ！　？私が先に行くから、あとで来るのよ！　？わかった！？」

？？「はいはい」

？？五月が返事をすると、皐は鼻を鳴らして自分の部屋に戻って行った。

？？「……今日も朝からうるさいな、皐は」

？？「おはよう、父さん」

？？皐と入れ違いに、一人の男性がリビングに入ってきた。寝巻きで、未だに眠そうだ。

？？「ああ、おはよう五月。また喧嘩したのか？　？兄妹なんだから、あまりケンカするなよ？」

？？「でもあなた、喧嘩するほど仲がいい、ともいうわよ？」

？？父親がテーブルにつくと、母親もテーブルについた。二人で仲良く、幸せそうに朝食を摂る。

？？「……お前ら二人はしすぎだ。弥生のいうことも一理あるがな……」

？？「もう、誉めてもなにも出ないわよ、あなた」

？？「……ほめとらん」

？？何気ない、いつもの風景。それなのに五月は、懐かしいような感じがした。それがなぜなのか、彼はわからなかった。

？？「……おい、起きろ」

？？仲良く話す両親の会話を聞いていると、なぜか友達の声が聞こえた。不思議なことをいつも考えている、変な女友達の声だった。

？？「起きろ。起きろ。ったく」

？？起きてるよ、と言おうとした瞬間、平和なこの世界に異変が起こった。輪郭がぼやけ、両親の姿が消えていく。

？？「父さん、母さん！」

？？大声で呼ぶが、二人は返事をしない。

？？「起きろ！　？……起きろと言っているだろうが！　？とっとと起きろ！」

？？声が大きくなるにつれ、両親の姿は薄れていく。

？？「……父さん、母さん！」

？？涙を流して別れを惜しむが、両親の姿はどんどんと薄れ、次第に消えていく。

？？「起きろ、ゴガッ！」

？？その声を最後に、夢の世界は完全に消えた。

？？

？？「……」

？？ゴガツが薄目を開けると、よく見知った天井が視界に飛び込んできた。いつも見ている、自宅のリビングだ。

？？「起きたか。死んだのかと心配したぞ」

？？「……流」

？？

？？視線を少し横にすると、自分を見下ろす魔法装束に身を包んだ流　？運が視界の端に映った。

？？「……一体何があったのだ？　？嫌な予感がして来てみれば……。君は倒れているし、三宅妹も……」

？？「な……んで痛っ」

？？体を起こそうと力を入れると、後頭部に鈍い痛みが響いた。

？？「動くな。応急処置だが、頭を殴られたのだ。何か異変が起きているとも限らん」

？？「うるさい……！　？なんでお前が俺たちの家にいる……？

？サツキはどこだ……！？」

？？こんがらがる思考をそのまま口にしたが、流は真摯に受け止め、答えた。

？？「私がここにいるのは鍵を君の服からかすめとり、家を開けたから。サツキの居場所は……」

？？「サツキ……！　？サツキが、攫われた！　？流、頼むから探してくれ！」

？？動けない自分に代わって、という意味だったのだが、流は無情にも首を振った。

？？「な……なんでだよっ！　？頼むよ魔法使い！」

？？「……すまないが、君の願いはどうあっても叶えることができない」

？？「なんでだよ、いいだろ別に！」

？？「……」

？？流は無言のままテレビのリモコンをつけた。床に寝かされているゴガツには、テレビ音しか聞こえなかったが、今回ばかりはそれだけで十分だった。

？？『昨日逢坂山で、近隣に済む十六歳女性の、遺体の一部が発見されました。あまりにも死体が分断されているため、現在も捜査は難航しています』

？？ゴガツはニュースを聞いて、嫌な想像をした。

？？「……まさか」

？？流はできるだけ感情を押し殺して、ゴガツに事実を告げる。

？？「昨日君が気絶している間……警察から連絡があった。彼らが言うことを端的に言うと、君の妹は……亡くなったそうだ」

？？「……！」

？？事実を告げられた時のゴガツを見た流は、あまりに痛ましい彼の表情に、思わず目を背けた。

؟؟

第十三話

？？「サツキが……死んだ？」

？？ゴガツは呟いたが、その意味が理解できなかった。いや、したくなかったのだ。たった一人の、家族。たった一人の、肉親。たった一人の……妹。彼女がいなくなってしまうなどということを、ゴガツは認めることができなかった。

？？「……ああ。葬式等はまだできないそうだ。犯人の捜査に全力を尽くすと彼らは言っていた」

？？「捜査するまでもねぇ！　？あいつらが殺したんだ！　？嘉蓋の野郎、殺してやる！」

？？上半身を起こそうとしたゴガツを、流が押さえつけた。それでもゴガツは起きようと必死になって暴れた。

？？「ダメだ」

？？「なんでだよ！？　？あいつ、両親殺して、その上サツキまで殺しやがって！」

？？「だからダメなのだ。確かにお前が言う犯人は警察にいるが、それは殺人容疑ではなく殺人未遂だ」

？？「……は？」

？？あまりに驚きすぎて、ゴガツは暴れるのをやめた。流はゆっくりとゴガツを床に寝かせ、頭と床の間に自身の膝を差し入れた。

？？「おま……？」

？？「気にするな。　？お前の後頭部を守るためだ。男子の寝室に

入るわけにはいかないからな。ここで我慢してもらうぞ」

???いわゆる膝枕をしているのというのに、流は照れもしない。むしろその顔は悲しそうだった。

???「ゴガツ、よく聞け。警察は、お前とサツキを殺そうとした人間として、嘉蓋を逮捕した」

???「……じゃあ、解決じゃねえか」

???動揺したせいで落ち着いたのか、ゴガツは割と冷静にそう言った。

???「だが、罪状は殺人未遂だ」

???「……なんでだよ」

???「二人を殺すつもりで殴って、気絶させた……。そう言ったそうだ。だが、山奥には行っていないと言うし、存在証明もあった。つまり、彼らは君たち兄妹を殴ったことまでは認めたが、それ以降は知らない、というのだ。そして、それに関する証拠もある」

???つまり、とゴガツは悔しそうに言う。

???「あいつら、サツキを殺した奴は別にいる、って言ってんだな」

???「そうなる。サツキの遺体は」

???「遺体とか言うなよ……」

???ゴガツはほとんど無意識に言った。サツキの死に関する言葉を聞きたくない。ゴガツの顔はそんな感じだった。

???「……サツキの体は細切れにされていたせいで、捜査は難航している。どうやって殺されたかさえ、判別しかねる状態らしい」

？？「……なんでそんなに」

？？どうしてそんなにサツキは酷い目に遭ったのか、という意味で言ったのだが、流はそうとらなかった。なんでそんなに知っているのか、という意味にとったのだ。

？？「うん？　？占いだ」

？？「はぁ？」

？？「……というのは冗談でな、警察の人間に教えてもらった」

？？「……なんだよ、それ」

？？せめて少しでも元気になってもらおう、と思って言った冗談だったのだが、ゴガツの反応はよくなかった。

？？「……君のいも……姉としてな」

？？「そうかよ。勝手にしろ」

？？もはや怒る気力もないのかゴガツはそう言ったきり黙ってしまった。しばらく、二人きりの空間に静寂が響いた。ゴガツは何も考えず、流はかける言葉が見つからず。

？？「……そういえば、さ」

？？ふと、思いついたようにゴガツが口を開いた。

？？「なんだ」

？？「お前、人……生き返させられるとかなんとか、言ってたよな」

？？「……ああ、言ったな」

？？流は静かに言った。

???「サツキ……生き返るか？」
???「……サツキの体はバラバラで、もはや見る影もない。サツキのままで蘇生は無理だ」
???「……そうか」

???ゴガツは淡々と言った。彼は一度軽く目を閉じると、流をしっかりみつめて、言う。

???「……流、膝枕ありがとうな」
???「気にするな」
???「今まで、ありがとうな」
???「……気にするな」

???流は嫌な予感を感じながらも、普通に受け答えする。

???「なあ、流」
???「なんだ」
???「サツキのところに、いってもいいか？」
???「……」

???予想通りだったとはいえ、流はすぐに口を開けなかった。目を閉じて、しばらく何かを考え込んだあと、彼女は口を開いた。

???「……私は魔法使いだ」
???「その格好見りゃわかるっての」
???「だが、その前に人間であり、ここ日本に住まう一般人であり、君の友達だ。だから言わせてもらう」
???「……」

？？流もゴガツを見据えて、しっかりとした口調で言った。

？？「死ぬな」

？？「……ヤダ」

？？子供がだだをこねるように、ゴガツは首をふった。

？？「そう言うな。君が死ねば、悲しむ人間がいる。それだけでは、踏み止まれないか？」

？？「誰が悲しむってんだよ。親も、妹も、誰もいないのに」

？？「私だ」

？？あまりにはっきりと、真摯な目で見つめられたため、ゴガツは流の顔を見ることができなくなった。視線をそらして、見慣れた床を見る。

？？「お、俺は、もう嫌なんだよ。わかるか？　？誰もいなくなったんだぞ？　？たった一人の家族が、死んだんだぞ？」

？？「……そうだな。だが、生きてゆけ。死ぬべきではない」

？？「俺のためってか？」

？？

？？ゴガツは嗤った。そんなこと馬鹿らしい。そんなニュアンスがこもった笑みだった。他人の流なら、こう突き放せば離れていく、と考えてのことだった。今は、とにかく一人になりたかった。

？？「正直言おう。君のためではない。私のためだ」

？？「……へえ」

？？けれど、ゴガツが意図に反して、流は離れていかなかった。

???「私はこの魔法装束を脱げばただの学生だ。この街に住む、一人の人間だ。だから、君が死ねば悲しむし、ここで君を見殺しにすれば、後悔する」
???「ほんとかよ」
???「本当だ。現に今、私は悲しい。サツキは……唯一の、女友達だからな」

???流は嘘でもなんでもなく、本当に悲しそうだった。目がうるんで、今にも涙が流れそうだ。

???「……そうかよ」
???「だから……できることなら……。……いや、できることなら、犯人を捕まえたい」

???一度、流は言葉を飲み込んだ。本当に言いたい何かを隠して、流は言葉を区切った。

???「犯人なら捕まってるじゃねぇか」

???ゴガツは嘉蓋が犯人だと信じて疑わなかった。

???「……もし、容疑者が言っていることが真実なら?」
???「んだと?」

???ゴガツは起き上がって、流を睨みつけた。

???「……もし、彼が言っていることが真実なら?　?それならば君は、無辜の人間を疑って」
???「俺とサツキを殴っておいて、無辜のだなんて言わせねえぞ」
???

？？これだけはゆずれない、というふうにゴガツは言った。
？？「悪かった。とにかく、犯人が別にいる可能性はゼロではない。ならば」
？？「ならば、なんだよ。探すってか？　？警察が犯人を捕まえる前に犯人を見つけ出して、サツキと同じ目に遭わせるってか！？」
？？ゴガツは溢れる感情に身を任せ、流の襟首に掴みかかった。ある程度覚悟していたのか、流は痛みに顔をしかめるだけで、驚きはしていない。
？？「そうは言っていない。警察に突き出す」
？？「突き出したところで、犯人は死なねえだろうがっ！」
？？「殺す事が目的なのか？」
？？「ああそうさ、悪いかっ！？　？サツキはたった一人の妹なんだ。あいつを殺した奴を……生かしておけるか」
？？流は戦慄した。ここまでの殺意を直に感じたのは、生まれて初めてだったからだ。
？？「……落ち着け。な？　？殺したあとはどうする？　？ずっと逃亡生活を続けるのか？」
？？「んなわけあるか。とりあえず、家族のところへいく」
？？流は、彼がとりあえず、と言ったところに底しれぬ狂気を感じた。このままではまずい。そう直感した。
？？「……。わかった。協力しよう」
？？「……本当か？」

???ゴガツは流の襟首から手を離した。うれしそうな顔が、逆に痛ましかった。

???「ああ。犯人を見つけよう。そのために私ができることはなんでもする。何かあったら、言ってくれ」

???「おう！」

???元気に立ち上がったゴガツだったが、彼の体はくらりと揺れた。流はあわてて彼を支えた。

???「まだダメージが残っているようだな。今日は眠れ」

???「……眠れない」

???「気持ちはわかるが」

???今は眠れ。そう言おうとした流だったが、ゴガツの様子が変わったことを見ると、訝しげに聞いた。

???「……どうした」

???「なあ、流」

???質問には答えず、ゴガツは青い顔をして、流に言った。

???「……なんだ」

???「今日だけでもいいから、一緒に寝てくれ」

???「……事情によるな」

???あっけにとられた流は、それだけしか言えなかった。

第十四話

??それから、しばらくの時がたった。布団がしかれた兄妹の寝室では、手持ち無沙汰に周囲を見回す流がいた。彼女は魔法装束を脱ぎ、その中に仕込んであった寝巻きに着替え、眠る準備は万全である。

??「……予想以上だ」

??流はそう呟いて、胸に手をあてた。その表情は、現在入浴中のゴガツへの哀れみに満ちていた。彼から話を聞いた彼女は、共に眠ることを決めたのである。今彼女はここで混沌とした思いを抱きながらゴガツを待っているのである。

??「他人が隣にいないと眠れない、か。可哀想なものだな」

??しかし、と彼女はかぶりを振る。

??「だが、だからといって不埒なことはさせん。……そうだ、一応」

??流は手早くそばに置いてある魔法装束をひっつかむと、一気に羽織る。寝巻き姿の少女から一転、魔法装束に身を包んだ魔女に。彼女は素早く口を動かすと、手を右に左に動かした。すると、ガラスを割ったときのような音がして、魔法が完成した。

??「……これで、よし。私に手を出そうとしたら痺れる。なかなか、うまくできたな。……さて、眠る準備でも……」

??流はまた魔法装束を脱ぐと、綺麗に畳んで枕元に置いた。正座で布団に座っていると、風呂から上がって、着替えも終えたゴガツが入って来た。

??「……なんで正座なんだ」

??「しらん。気がついたらこうなった」

??「……そっか」

??ゴガツは風呂上がりでほんのりと上気した頬をかくと、布団に潜り込んだ。

??「……悪いな、流」

??「死なれては困るからな」

??流は肩をすくめると、自分の布団に入る。彼女は気丈に振舞ってはいるが、内心は色々と混乱していた。

??「……じゃ、電気消すぞ。おやすみ、流」

??「ああ。おやすみ、ゴガツ」

??ゴガツは手元にあるリモコンのスイッチをいじった。すると、ふっと灯りが消える。外からの光がほんのりと、寝室を照らす。薄暗くなった寝室で、黙ったまま背中合わせに寝ている二人。ふと、流が口を開いた

??「……なあ、ゴガツ」

??「……ん、なんだ」

??嘉蓋に殴られたダメージや、サツキの死を聞いたショックでゴガツは疲れているらしく、その声はもう眠たそうだった。

??「……いや、なんでもない。良い眠りを、ゴガツ」
??「……ぁぁ」

??そう答えたのを最後に、ゴガツは寝息を立て始めた。流は体を起こすと、ゴガツの寝顔を見る。

??「……私はさっき起きたばかりなのだ。眠れるわけがなかろう……」

??現在、朝の十一時。本来ならば学校に行っている時間帯だが、ゴガツはもちろん、彼に付き添っていた彼女も、今日は欠席である。基本的に保健室登校の彼女は欠席することに頓着はしないし、ゴガツの出席日数等の心配もしない。が、彼が朝から眠ると言ったことに関しては、心配していた。

??「……時間感覚が抜けているのか、それとも疲れているのか、もしくは……」

??もしくは、身体に何か異常があるのか。昨日から一日の間昏睡状態になるほど殴られたのだ、何か問題がないとは限らない。倒れていたゴガツを流が病院に連れていかなかったのは、警察沙汰になるかもしれないという懸念があったからだ。もっとも、その懸念も、今となっては無意味になってしまったが。

??「夢の中だけでも幸せに……なれないのか。死にたくなるのも頷ける……」

??起きれば地獄、眠っても地獄では、逃避したくなるのも仕方ないことなのかもしれない。それでも、流はゴガツを死なせるつもり

はなかった。

???「たとえ君がいくら死に望もうとも……死なせはしない」

???静かに、流は決意した。

???「……サツキッ！」

???それとほとんど同時に、ゴガツが叫んで飛び起きた。

???「……はぁ、はぁ、……サツキ、は？」

???息を切らせて、胸を抑えながらゴガツは流に聞いた。その表情は何かを求めているような、切ない表情だった。

???「あ、そ、そのそれは」

???流は何も言えなくなった。サツキはもういない。頭に浮かんだその言葉を、口にすることができない。

???「……そっか。そうだったな。サツキは、もう……」

???ゴガツはよろよろと立ち上がると、寝室を出てどこかへ行った。その足取りは、幽霊のよう。

???「……まずい」

???流は魔法装束を羽織ると、ゴガツを追いかけた。階段を駆け下り、ゴガツの姿を探す。

？？「……ゴガツ！」

？？ゴガツは呼ばれて、振り返った。

？？「……なんだ。何か用か、魔法使い」

？？リビングに幽鬼の如く立つゴガツの手の中には、果物ナイフがあった。その切っ先を何に向けるのかは、まだ流にはわからない。

？？「……それを、どうするつもりだ？」

？？「……誰に向ければいいと思う？」

？？ゴガツは笑って流を見た。

？？「お前……なわけねえな。俺か？　？それとも……嘉蓋か？」

？？すっと、ゴガツはナイフを水平に構えた。

？？「……落ち着け、ゴガツ」

？？

？？兎にも角にもナイフを取ろうと、流は説得にかかった。

？？「落ち着いてるさ。俺は冷静だよ。多分、今までで一番頭が冴えてる」

？？「……正気に戻れ」

？？ゴガツは鼻で笑った。

？？「正気に？　？正気ってなんだよ。俺がおかしいってか？　？まあ、そりゃ認めるよ。今すぐ、俺が死ぬかあいつを殺すか二つに

ひとつ、なんてかんがえてる俺が正気なわけがないよな」

???軽くナイフを弄びながら、ゴガツは笑う。

???「でさ、教えろよ、流。正気に戻れ、って言うぐらいだ。正気ってのがなんなのか、わかってんだよな？」

???「……わかっているさ」

???「なら、教えろよ。なあ。今の俺がダメなら、一体どんな俺ならいいんだ？」

???言葉を探し、文章を練って、セリフを作る。流の頭では、もうゴガツに言う事が完成していた。

???「……」

???しかし、それを実際に口にすることはできなかった。

???

第十五話

???ゴガツはナイフを構えながら、何に対して刃を向けるべきかわからなかった。彼は混乱していた。激変した周囲の環境に、未だ適応できずにいたのだ。

???「なあ、流」

???いきなり悪夢の元凶がやってきたかと思えば自分から何もかも奪っていって、寝ても覚めても地獄のような状況。唯一そばにいる人間は夢見がちな魔法使いで、死にたいと言っても死なせてくれず、しかも自分が狂っていると言う。

???「正気ってなんだよ。ええ？　？俺のどこがおかしいんだよ。教えてくれよ」

???「……君は、少し落ち着いた方がいい」

???「落ち着いたら、っていうけど。俺は落ち着いてるよ」

???ゴガツは自分では落ち着いてるつもりだった。誰よりも、冷静なつもりだった。

???「……いや。君は落ち着いていない。認めて欲しくば……その刃を置け。そうすれば、落ち着いていると認めてやる」

???「……ったく。わかったよ」

???ゴガツは嘆息すると、果物ナイフを元にあった場所に戻した。

???「これで俺は落ち着いてる……そうだろ？」

???「ああ。……そんなものを取り出して、どうするつもりだった

のだ？」

？？ゆっくりとした足取りで、流はキッチンにいるゴガツに近づく。

？？「さあな。……死にたかったのかもな」

？？「……そうか」

？？ゴガツは流に答えて、初めて気付いたことがあった。

？？「……俺、冷静じゃなかったな」

？？自分では落ち着いてる落ち着いてると思っていたが、そうではないことを、ナイフを置いたことで気付けたのだ。

？？「魔法使い」

？？「ん？」

？？「お前の魔法で、俺を眠らせてくれ」

？？ゴガツは最後の希望だとでも言うように、流に頼み込んだ。

？？「……お安い御用だな。ほら、寝室に戻れ」

？？「……おう」

？？二人はゆっくりと寝室に戻った。ゴガツは布団を乱雑にかぶると、流を見上げる。

？？「夢を見ないように、とかできるか？」

？？「ああ、もちろんだ」

？？流は魔法装束の裾から手を出し、ゴガツの額に当てる。

???「……ねむ、おっと」

???呪文を唱えようとした流だったが、何かに気付いて口を閉ざした。

???「……ゆっくりと眠れ」

???呪文を唱える前に、ゴガツは眠っていた。ある日学校から帰ろうとしたら殴られて、起き抜けに家族の死を知らされ、極めつけに眠っても悪夢……。彼は疲れ切っていたのだ。だから、気絶する様に眠りについた。

???流は夢を見ないようにだけすると装束を翻し、寝室をあとにする。

???「……さて、儀式にとりかかるか……」

???そう呟くと、彼女は三宅家から出て行った。

???彼女が出たあとには、健やかな表情で眠るゴガツだけが残された。

???「……ん」

???朝の光を感じて、ゴガツは目を覚ました。

???

???「……サツキ」

???身体を起こして隣を見るが、そこに毎日見ていた姿はない。

??「……」

??とりあえず立ち上がると、いつもの習慣で階下に向かい、リビングに入る。サツキとほぼ毎日見ていたテレビが、嫌に目に付く。

??「……っ」

??嫌な事を思い出したときの様な表情になると、彼は首を振った。彼の視線はテレビからソファ、冷蔵庫と右から左に移動して行き、最後には台所へと向かった。そして、銀色に輝く果物ナイフが、彼の視線を釘付けにした。

??「……サツキ、父さん、母さん」

??ふらふらとした足取りでナイフの置いてあるところまで辿り着くと、それを乱暴にひっ掴んだ。

??「……みんな」

??ゴガツの脳裏に、明るい笑顔で笑う妹の姿が浮かぶ。そして同時に、全てを奪った憎い敵の顔も浮かんだ。

??「……サツキ、お前は……」

??今どこにいるのだろう、とゴガツは考えた。天国だろうか、地獄だろうか。それともそのどちらでもないのだろうか。

??「……一体お前は……どこにいる？」

??すっと、彼はナイフの刃をを自身の首筋に添えた。少しづつ首

に向けて力を加えて、首をかき切ろうとする。

??「私はここにおりますわ、兄様」

??あと少しで首の皮を切ろうとした時、彼の後ろから鈴のような声が聞こえた。あわてて、ゴガツは振り返る。

??「……お前は?」

??「私の名前は三宅　?サツキ。あなたの唯一無二の妹です。」

??そう言ったのは、黒いドレスに身を包んだ白髪の少女だった。背はすらりと高く、プロポーションは整っていて、顔も美形。外見だけなら、非の打ち所がない人間である。しかし、雰囲気や喋り方、声の抑揚などは全て、ゴガツがよく知る妹のものだった。

??「……そんなばかな」

??複雑な顔をして、ゴガツは言った。

??「兄様。私は一度死にました。けれど蘇りました。息もできるし自分で動けます。身体も人なら心も人です」

??ゴガツは呆然として声もでなかった。そんな彼に構わず、サツキを名乗る美少女は口を開いて機銃のように話し続ける。

??「私はいつもいつもいつもいつも袖にされてきました。その理由の全ては私が妹だからです。しかし、もう違います。心はあなたの妹ですが、身体は全くの他人。ならば、兄様は私の求愛に応えて」

??「応えん」

??

？？とにかく、ゴガツはそれだけを言った。するとサツキと名乗る美少女はしょんぼりとうなだれた。

？？「……そうですか……」

？？「サツキ。ちょっとこっちこい」

？？「はい！」

？？サツキを名乗る彼女は、ナイフを持ったままのゴガツを、全く警戒せず、手が届くすぐそばまで近づいた。恐る恐る、ゴガツはナイフを持つ手を上げ、鈍く光る切っ先をサツキの喉元に突きつける。

？？「……？　？どうかされましたか？」

？？「少しも警戒しないのか」

？？「はい。兄様が私を殺したがっているのなら、私の命はそれまでで構いません」

？？「……お前、生き返ったばっかだろ」

？？淡々と、ゴガツは聞く。ゴガツが目の前の少女にナイフを突き付けた理由。それは、本当に彼女がサツキかどうかを確かめるためだったのだ。

？？

？？「たとえそうでも、兄様が私の死を望むなら、私は再び骸に返ります」

？？「……」

？？ゴガツは、ゆっくりとナイフを降ろし、台所の上にナイフを置いた。

？？「……サツキ、ナイフ、悪かったな」

？？「いえ。気になさらずとも」

??「それと、今からはたくんで、すまん」

??言うがいなや、ゴガツはサツキの頬を張った。乾いた音が短くして、サツキの顔が横に向く。

??「……サツキ。お前がいなくなって、俺がどれだけ寂しかったか、わかるか？」

??「……いえ」

??サツキは正直に答える。

??「お前が生き返ったかも、って思って喜んで、そんなわけないって考えて悲しんで、結局のところお前だったときの俺の嬉しさ、お前にわかるか？」

??「……いえ」

??かなしそうにサツキは答える。兄の感じていることがわからないのが、彼女にとって一番辛いのだ。必死にわかろうと努力しても、『親しい家族を亡くした経験のない』彼女にはわからない。

??「なあ、サツキ」

??「なんでしょう」

??「もう二度と、俺の前で死ぬとか言わないでくれ」

??サツキは答えなかった。彼女にとって兄のために死ぬのは当たり前で、それを兄にわかってもらうのもまた、当たり前だったからだ。当たり前のことを禁止されて、彼女は戸惑う。

??「……いや、なのか？」

??「いえ、そのようなことは。ただ……」

???サツキは口ごもった。

???「ただ、なんだ？」

???「兄様のために死ぬのは、私にとって当たり前なのです、だから……」

???「……」

???ゴガツは苦い顔をした。今更ながらに妹の異常性を確認したからだろう。

???「サツキ」

???「はい？」

???ゴガツは、その異常性を利用することにした。とにかく今は、すぐに死ぬ死なないの話にもっていきたくない。そのために、ゴガツは口を開く。

???「俺の命令は絶対。……そうだろ？」

???「はい。もちろんですわ」

???「なら、生きろ」

???ゴガツはサツキの目をしっかりと見て言った。

???「命令だ。生きろ。何があっても生き延びろ。とにかく……もう俺に、親しい誰かを失わせないでくれ」

???ゴガツの命令を聞くと、サツキは一度目を閉じ、決意するように大きく息をすると、目を開いてゴガツを見つめた。

？？「わかりましたわ。もう二度と……私は自身の死を考慮しません。誰を蹴落とす結果になろうとも、私が生き残ることを優先いたします」

？？サツキの誓いを聞いて、ゴガツは胸を撫で下ろした。

？？「ありがとな」

？？「……いえ。少し……辛いですが」

？？サツキの誓いは、ゴガツが思っているほど軽くはなかった。一度死を経験した彼女は、自身が死ぬ姿を誰よりも鮮明に思い描くことができる。他の様々な危機も、他の人間に比べれば遥かに詳しく、正確に想像できる。そんな彼女が、兄の命令に従い、いかなる状況でも自身の命を優先すると誓ったのだ。他の誰より、自分を。今まで兄を最優先としてきたサツキにとって、それは重大な変化だった。

？？「……気に入ってくれたようだな」

？？

？？微笑むゴガツと、複雑な表情のサツキ。二人の後ろから、少女の声がかけられた。

？？二人は振り向き、サツキは声の方に身体を向ける。声をかけてきたのは、制服姿の流　？運だった。

？？「サダメ様」

？？「流」

？？ゴガツは違和感を感じた。サツキが流を呼ぶ呼称が、おかしいからだった。

？？「……サツキ？」

？？「どうかしましたか、兄様？」
？？「いや、今流のこと運様って」
？？「それには少し理由がある」

？？流はサツキが質問に答える前に、会話に割り込んだ。

？？「それを説明してやる。だから、制服に着替えろ、ゴガツ」

？？あえてサツキの名を除けて、彼女は言った。
？？
？？

第十六話

??流に言われるままに着替えたゴガツは、彼女に連れられて学校への道を歩いている。隣では黒いドレスの美少女、サツキが従者のようにゴガツの一歩後ろを歩いていた。

??冬も間近に迫ったこの季節、街路樹から落ちてきた赤色の落ち葉を踏みながら、流は事情を話す。

??「事情と言ってもたいしたことはなくてな、ただ蘇生魔法を使っただけだ」

??「だけって……」

??基準のおかしさにゴガツは苦笑するが、その笑みに昨日までの狂気はない。たとえ外見が違えど、妹が生き返ったことが効いているのだろう。

??「で、なんでサツキは運様、なんて呼び方してんだよ?」

??「その、それは……」

??サツキは口に手を当てて言い渋った。前までと全く同じ仕草だが、美人がやると見違えるほど可愛く見える。

??「それは、私の身体を蘇らせたのはサダメ様で……もし、無礼を働いたら、また消されるのではないかと……」

??流の顔色を伺うように見ながら、サツキは言った。

??「はっはっは。気にするな。私は生み出すだけだ。もう私の意識から離れているからな。消そうと思っても消せはしない。安心し

て呼び捨てにしてくれ」

??流は朗らかに笑って言った。

??「そうですか……。ならば、運さん」

??「ふむ。下の名前か。新鮮だな」

??流は気恥ずかしそうに頬をかいた。

??「新鮮、ねえ。俺らは下の名前で呼ばれるのがほとんどだから、よくわかんねえ」

??「それは君たちが兄妹だからだ」

??「だろうな」

??四六時中一緒にいるのに、三宅と呼んではどちらを呼んだのか分かりづらい。だから、三宅兄妹を知る人は皆、下の名前で二人を呼ぶのだ。

??「……周りが騒がしいな」

??ふとゴガツが見回すと、周りにいる登校中の生徒が、ゴガツ達のことを訝しげな視線を向け、ひそひそと噂話をしているのだ。

??「なぜでしょうか？　?兄様、私がいない間に学校で何かありましたか？」

??「いや、お前がいない間は学校には来てねえからな」

??サツキもゴガツも、なぜ噂のタネにされるのか全くわからない。

??「……ゴガツ、なぜなのか本当にわからないのか？」

???二人は頷く。

???「……サツキ、自分の身体を見てみろ」

???「？」

???サツキは戸惑いながら、自分の身体を見る。全身を包む黒いドレス。それと対照的な白い肌。柔らかそうな双丘は、蘇生する前よりも遥かに大きい。指先も細長く美しい。噂のタネにされるほど醜くはない、とサツキは結論づけた。

???「なにか、問題でも？」

???「……君の名前は？」

???「三宅サツキですが……」

???「君の体はどうした？」

???「私の体はサダメさんに魔法で作っていただいて……あ」

???ようやく合点がいったというように、サツキは声を上げた。

???「……そういえば私、死んだんでしたわね」

???「……ああ、それでか」

???ゴガツも遅まきながら理解した。

???「そっか。あのサツキは、もう死んだんだったな」

???「ええ。そうですわね」

???なんでもないことのように、二人は言った。大切なことは一時的に忘れ、今互いがいることを噛み締めている……そんな雰囲気だ。

???「ふふふ、昨日までとは大違いだな、ゴガツ」
???「ん、おかげさまで。ありがとな、流」

???流とゴガツは笑あったが、サツキは訝しげな顔をした。

???「……兄様？　？私がいない間、サダメさんと何をなされていたのですか？」
???「いや、なんでもない」
???「一緒に寝てただけだ」
???「おいっ！？」

???冗談めかして流は言ったが、ゴガツは内心冷や汗をかいていた。

???「……兄様？　？サダメさんが言ったことは真実ですか？」
???「ああ～いや、その……」
???「兄様？」

???ずい、とサツキはいつもの調子で顔を近付けて言った。

???「……！　？な、ななななんでもないっ！」

???いつも見ている妹ではなく、絶世の美人が近づいて来たので、ゴガツは思わずどきりとした。

???「なぜ、動揺なさるのですか？　私は兄様のことを愛しています。しかし、兄様とは結ばれないのも理解しています。ですから、兄様がどなたと結ばれようと、私は怒りませんし、悲しみません。……ですから、そういったことに及ばれたのなら、そう言っていただいてもよろしいのですわよ？」

？？ゴガツは相変わらずの反応にほっとするも、空恐ろしくも感じた。なぜなら……。

？？「そう言うが、サツキ。もう体は他人なのだぞ？」

？？流の言った通り、もうサツキの体は他人なのだ。それは、今までゴガツがサツキを袖にしていた理由が消えたということを意味している。

？？「……その、それは」

？？本来ならば喜びそうなところなのに、サツキは渋い顔をした。

？？「……どうした？」

？？「い、いえ。その、兄様。私は兄様の妹です。兄様のことならなんでも理解しています。……兄様は、妹とは恋できない。そうおっしゃられていました。で、ですが！　？私は兄様のことを愛しています！　？たとえこの身が朽ち果てようとも、この想いは変わりません！」

？？

？？サツキは切羽詰まった表情で、ゴガツに詰め寄る。通行人の多くが湧き、どよめきが生まれる。

？？「わ、わかった。わかったから、ちょっと離れてくれ」

？？あまりの勢いに気圧され、ゴガツはサツキを抑えるように言った。

？？「……わかりましたわ。それで、兄様。お返事は？」

？？「まあ、俺もお前を愛してるけど……恋愛感情じゃねぇ」

？？いつものように断ると、サツキはぱあっと明るくなった。
？？「そうですか！　？いつか振り向かせてみせますわね！」
？？振られたというのに、彼女は嬉しそうだった。ニコニコ笑顔で、再び歩き始めたゴガツと流について歩く。
？？「……ふむ」
？？流はその一連の様子を見て、一人で何やら納得していた。
？？「どうした？」
？？「いや、なんでもない。……あ」
？？
？？流は進行方向にある一点を呆然と声を上げた。
？？「どうした？」
？？「……うるさいやつがいる」
？？ゴガツが聞くと、流は肩をすくめて答えた。彼女が見ている方向には、登校中の学生の内一人がいた。
？？「……ん？」
？？その学生は振り返ると、ゴガツとサツキを見て驚いたように目を見開き、ゴガツ達に近づいてきた。
？
？？「よ、よう、ゴガツ！　？……その、後ろの人は誰だ？」

？？誰もが訝しげにし、避けるようにしていた三人に近づいてきて、話しかけてきたのは千秋　？昌だった。

？？「よう、昌。後ろのって？」

？？「お前の後ろにいる美人さんは誰だって聞いてんだよ！　？とボケんな」

？？「サツキだよ」

？？からかうように聞いた昌だったが、ゴガツの答えを聞いて、固まった。

？？「……は？」

？？「だから、サツキ。生き返ったんだよ」

？？「い、いきか、って、え？」

？？

？？ゴガツの説明も、理解できないのか呆然としている。

？？「……もっと詳しく説明してやれ、ゴガツ」

？？「だな」

？？ゴガツと流は肩をすくめると、固まった昌を連れて、再び歩き出した。

？？「……さて、説明するか」

？？そう言うと流は、かいつまんで事情を説明した。

？？それが終わるころに、四人は学校に着いていた。

？？

第十七話

「ありえねえ」

最後にゴガツが登校したのと何も変わらない教室。そこで、流から話を聞いた昌は静かに首を振ったのだった。彼の周りにはよみがえったサツキを不思議そうに見るクラスメイトの姿があった。

「ありえねえって、サツキはここにいるじゃねえか」

「あのな。お前に殴られるのを承知で言う。嫌われるのも承知で言う。サツキちゃんは死んだんだ」

目に見えてゴガツは不機嫌になった。それでもかまわず、昌は続ける。

「その子をどっから見つけてきたのかは知らねえけど、身代わり立てて今までどおりにするなんて、変だ」

「このサツキは身代わりじゃない。生き返ったんだ」

「……そうか」

昌は悲しそうに目を伏せた。その表情に、流は思わず口を出してしまう。

「昌、よく聞け。私の魔法、それで彼女はよみがえったのだ」

「……お前が原因か」

す、と流は昌の耳元に口を寄せた。思わず顔を赤くする彼だったが、彼女が話した内容で、その赤さは青に変わった。

「代償はある。死ぬ数日前までの記憶が抜け落ちているのだ。記憶が抜けた理由は今探っている最中だが、会話で記憶の糸口をつかむ可能性がある。いいか、昌。サツキの前で皐が死んだ云々言うな。さもなければ、彼女の心に消えない傷を刻むことになるぞ」

「どういうことだよ？」

昌はわけがわからず、ゴガツとサツキに聞こえないように聞き返した。

「人は失われた記憶を取り戻したとき、再びそれを体験する。……サツキにもう一度死を経験させたいのか？」

「……わかったよ」

しぶしぶながらも、昌はうなずいた。未だ、彼の中ではサツキが生き返ったということに実感が持てなかった。流が言っているのは方便で、目の前にいるのはサツキのふりをしただれか。そう思わずにはいられない。

「どうかされましたか、昌さん」

「……いや、なんでもねえよ」

心なしか冷たい言い方になってしまったのは、仕方がないだろう。

「そうですか。では、サダメさん、行きましょうか」

「そうだな」

そろそろチャイムが鳴ろうかというところで、サツキが流に言った。

「ん、どこへ行くんだ、サツキ？」

ゴガツが不思議そうな顔をしていった。

「保健室ですわ。私はもう、社会的には存在していませんので。それでは兄様、また放課後」

「……おう」

そう言って去っていくサツキと流を見送ったゴガツだったが、その表情は寂しそうだった。

「……なあ、ゴガツ」

「なんだよ」

「もしサツキちゃんが生き返ってたとしても、サツキちゃんは変わるぞ」

「どういうことだよ」

静かに、ゴガツは昌に言った。

「死ぬって、そう簡単に乗り越えられるものじゃねえってことさ」

妙に達観したことを昌が言ったと同時、チャイムが鳴った。

「……やはり、慣れんか」

保健室の二つ隣り合ってあるベッドの上、サツキと流の二人はお

互い一つのベッドに座って話していた。

「ええ、ちょっとどこかぎこちないの」

兄がいないためごく普通に話すサツキは、自分の腕をなでながら言った。

「ふむ、具体的表現はできるか？」

「……ちょっと難しいかも。なんていうか、全体的に鈍い、っていう気もするし、感覚が鋭すぎる気もするし、どこか現実感がないっていうか」

サツキの話は要領を得なかったが、流には言いたいことが理解できた。

「ふむ、まあ要約すれば、不調ということだな」

「……かなり端折りすぎな気もするけど、だいたいそんな感じ」

サツキは自信なさそうに頷いた。

「まあ、その体は魔法体だからな。慣れるまでは時間がかかるだろう。急に体が動かなくなったりはしないな？」

「ええ、今のところは」

サツキは中空を見ながら答えた。彼女の記憶の中に、急に意識が途絶えたことはない。

「そうか。なら、初動は問題なしだな」

「ならいいの。……で、サダメ」

急に声のトーンを落としたサツキに、流は彼女の方を見た。サツキは思いつめたような表情をしていた。

「なんだ」

「この体は、子供を授かれる？」

「……」

流はサツキをにらんだ。彼女はあわてて両手を振って、否定した。

「ち、違う違う、冗談冗談！　そんな怖い顔しないでよ！」

「お前が言うと冗談に聞こえんのだ。まだ早い」

「そ、そう。で、本題なんだけど、私、あとどれだけ生きれるの？」

この質問には、さすがの流でも固まった。

「どういう意味だ？　私の魔法が不完全だとでも言いたいのか？」

「そういう意味じゃないって。事実を知りたいの」

「普通の人間と変わらん」

「ほんとに？」

サツキは珍しく疑り深かった。よほど、兄といられる時間が大切なのだろう。

「ああ。死に急ぎさえしなければな」

「……そう」

サツキは今朝の命令を思い出す。何を優先してでも、生きる。そのためには、自分の体の寿命を知る必要があったのだ。

「どうした、サツキ。珍しくしおらしいぞ」
「……ええ。それから、頼ってばかりで悪いんだけど、一つ頼まれてくれる？」
「何をだ？」
「……それはね」

サツキはこそこそと流に頼みごとを言った。

「……覚えていないのか」
「うん。だから、知りたくて」

流はサツキの答えを聞いて苦い顔をした。

「知ってどうする」
「どうもしない。その人が近づいてこなければ、それでいい。とにかく、知っておきたいの」
「復讐はいいのか？」

サツキはゆっくりと首を振った。

「……なんだか、そんな気持ちになれないの。覚えていないからかな」

サツキはどこかさびしそうな表情になって自分の胸に手を置いた。昨日までとは全く違う体。兄の前で気丈にふるまっているが、まだ全然慣れていなかった。

「……ま、その願いを叶えれば、不調も治るかもしれん。魔法使いとしては、動かないわけにはいかないな。では、しばらく学校を開ける。今度会うのは答えを見つけてからだ」

「いいの！？」

サツキは驚いたような顔をした。彼女の願いはダメ元で言ってみただけらしかった。

「何を言っている。それに、この程度はサツキを甦らせた者として当然の義務だ」

そういうと、流はベッドから降り、そばに置いてあった鞄から魔法装束を取り出すと、一気にそれを羽織る。

「朝はひやひやしたぞ。何せいきなり教室だったからな。では、さらばだ。また会おうな、サツキ」

「え、ええ。サダメ」

コツコツと靴音を響かせ、流は保健室の扉までくる。

「……お話は終わった、流？」

「ああ。保健室、貸してもらってすまないな。私の代わりにその子の面倒を見てやってはくれんか？」

「事情はわかったけど……」

ここに連れてくるとき、流はサツキのことを先生に説明していた。だが、それでも全く知らぬ人間をここに置いておくのは渋っていた。

「頼む。ここしか居場所がないのだ」

「おうちは？」

「一人になるのが怖いのだとさ」

それを聞くと、先生は顎に手を当てて思案し始めた。

「……やっぱり、殺されたからかしら。そういうことならしばらく預かってもいいわ。……それにしても、お人形みたいね、あの子」

保健室の先生はサツキのほうに視線をやりながら言った。

「……人形か。本人の前で言ってやるなよ？」

「わかったわ。で、いつまで預かっとけばいいの？」

流は数秒考えた後、口を開いた。

「ゴガツに話しておくから、放課後彼が来るまでいい。頼む、私の代わりに彼女を守ってやってくれ」

「はいはい、言われなくても」

その返答に安心したのか、流はほっとしたような表情になって、保健室を出て行った。

「……大変ね、ホント」

サツキに聞こえないように、彼女はつぶやいた。

今、三宅兄妹の周りは慌ただしい。それを二人はどう乗り越えるのか。

「サツキちゃん」

「なんですか、先生？」

特に敬意がこもっていないような軽い口調で、サツキは返事した。

「何か飲む？」

「いいです。私はここでじっとしてます」

サツキはベッドの上から動かずそういった。その表情は曇っていた。

「……どうしたの？」

「聞いてもらえますか？」

「ま、それも仕事のうちだしね」

冗談めかして先生は言ったが、サツキはクスリとも笑わなかった。

「……私は……」

サツキは重々しく、口を開いた。

第十八話

朝の保健室、サツキと先生しかいない空間で、サツキは口を開いた。サツキはベッドに座っていて、先生は保健室にある事務机の丸椅子に座り、彼女の話を聞こうとしている。

「みんなが私のこと気遣ってくれてるっていうのはわかるんです」

サツキの独白はそんな言葉から始まった。

「でも……なんでかな、兄様に気遣ってもらえているというのに、私は……何も、嬉しくなかったんです」

「嫌だったの？」

サツキは首を振った。黒い喪服のようなゴシックドレスを自分で見回し、ため息をついた。

「何も、感じなかった。兄様に、愛する兄様に声をかけてもらったというのに、何も」

サツキは自身の胸に手を置いて、苦々しい声で言う。

「私、思い出せないんです」

「何を？」

「私がどうして死んだのか」

先生は悲しそうな顔をして首を振った。

「自分が死に様など、知らないほうがいいでしょ」
「でも、知っていなきゃダメな気がするんです。私が兄様に対して何も感じなくなった原因が、それにあるような気がして」
先生は話を聞きながら、考える。
「そう。でも、知ったらもっとひどいことになるかもしれないわ」
「……それは、わかってます、先生。でも、私は兄様を愛していたいのです。このまま何も感じなかったら、私」
その言い方は、何も感じないことが苦しいのではなく、どうなってしまうのだろうという不安が現れていた。
「……完全に何も感じないの？」
「いえ、わずかには感じるんです。でも、薄くて。私、このまま何も感じない人形みたいになっちゃうじゃないかって、怖くて」
今にも泣きだしそうな顔になって、サツキは言った。
「……そういう不安があるうちは、大丈夫よ」
「先生、私、どうすればいいんですか」
サツキの問いに、先生は明確な答えを出せずにいた。彼女は多くの生徒を見てきたが、さすがに生き返った生徒までは見たことがなかった。
「これから先は、私の経験」
「え、はい」
一つだけ前置きして、先生は言った。

「今までひまわりみたいに明るかったある女の子が、ある日突然笑わなくなったの。声をかけてもうわの空で、ここに来ることさえ少なくなっていった」

サツキに話しながら先生は立ち上がり、少しずつサツキのほうへと歩き出す。パンプスがリノリウムの床を叩く音が響く。

「なぜなのですか？」

「その子、事件に巻き込まれて、攫われちゃったの。一週間ほど」

サツキは目を伏せた。高校生の女子が一週間も攫われて、笑わなくなって。それが何を示しているか、サツキは容易に想像できた。

「その子は、言ってたわ。『感じたくないから、何も感じない』って。その子は次第に学校どころか生きることさえ拒否し始めて、最後には」

何かを思い出したのだろうか、先生は苦い顔をして、それから先を言うのをためらった。

「……私が言いたいのは、そうやって、感情が薄れていくことを、受け入れないで。辛いと思うわ。でも、私はあなたに死んでほしくないの」

サツキは泣きそうな顔になって、先生を見た。

「どうして、そんなにも気にかけてくれるの？」

「……あなたが、私の生徒を名乗ったからよ」

静かに、先生はサツキの隣に腰かけた。流から何度も話を聞かされていたのもある。しかし、それ以上に過去の生徒と、今のサツキが重なったのが先生を動かした。

「あなたの体には、この学校のどこにも、ここの生徒だという印がない。でも、私はあなたのことを三宅皐だと思ってるわ」

「……ありがとう、ございます」

サツキはそういうと、先生の肩にもたれかかった。

「……ぐすっ」

「……辛かったわね」

涙を流すサツキの頭に、先生はぽんと手を置いた。慈しむように、サツキの頭をなでる。

「……私、ずっと不安でした。ぐすっ。兄様とサダメ以外の誰にも、私だと思ってもらえないんじゃないかって……」

先生はうんうんとうなずいた。

「……本当に、ありがとうございます」

「……気にしないで」

先生は微笑みながらも、不安を感じていた。今日、彼女とサツキはほとんど初めて出会う。何度か体育でけがをした時消毒しに来た程度で、流のように際立った接触はなかった。そんな間柄の人間に認められただけだというのに、サツキは安心しきって泣いている。その状態に、先生はサツキという存在の危うさを感じた。

サツキの涙は、しばらく止まることがなかった。

第十九話

サツキの気持ちは、あふれ出てしまっていた。死んでから今まで、彼女は涙を流したことがなかった。ゴガツと同じか、それ以上の辛い思いをしたはずなのに。泣く余裕がなかったのだ。兄は未だ、妹の涙を受け入れられるまでに安定していないし、流はもうすでに行ってしまった。親友のアリスにしても、いきなり死んだはずのサツキが出てきて受け入れられるとは思えなかった。

「うう……」

サツキは保健室のベッドの上で、保健室の先生にもたれかかるようにして抱きつき、涙を流している。頬を伝う水滴は、悲しみゆえか苦しみゆえか。どちらでもあるようで、どちらでもないようで。

「……サツキちゃん」

先生は静かに胸を貸しながら、サツキの変わってしまった背中をさする。それがサツキには、ひどく懐かしいことのように感じた。遠く遠くに失われてしまったはずのぬくもり。何も覚えていないはずの彼女は、さする手に違う誰かを思い描く。それが誰かはわからない。けれど、今ここにいる先生ではない、やさしそうな女性がサツキの中にイメージされた。

「……先生、ありがとうございます」

ひとしきり泣き終わると、サツキは目じりを白く細長い指で拭いながら言った。

「気にしないで。この仕事に就いていれば、生徒に胸を貸すことが多いから」

それでも、サツキみたいな子はなかなかいないけど。先生は心の中でそう付け足した。

「先生。先生は、生徒さんがいなくなってしまったことって、ありますか？」

サツキは重苦しい雰囲気でそう切り出した。

「……何度か」

先生は気丈に言ったが、その声はわずかに震えていた。

「どんな気持ちだったんですか？」

「……なぜ、そんなことを聞くの？」

先生はいぶかしげに聞いた。いくら彼女でも、そこまで踏み込んだことは聞かれたくないのだろう。

「兄様が、私がいなくなってさびしいと、悲しいとおっしゃってくださいました。けれど、私には肉親を失うということがどういうことか、理解できません。なので、兄様の気持ちを理解するためにも、先生の気持ちを教えてほしかったんです」

先生はピクリと背中をなでる手をを止めた。

「……今、なんて」

「兄様の気持ちを理解するため」

「その前」
「……私は肉親を失うことがどういうことか、理解できません」
先生はますますいぶかしい顔をした。
「……サツキちゃん、あなた、ご両親は」
ブツン。サツキの意識が、音を立てて落ちる。どさりと膝の上に落ちてきたサツキに、先生は驚いてサツキの肩を憂さぶった。
「え、サツキちゃん、大丈夫？　ねえ、ちょっと！？」
なんど揺さぶっても反応ひとつ返さないサツキに、先生はあわてる。サツキを膝の裏と背中とで支えて抱き上げると、先生は立ち上がってサツキをあおむけにベッドに寝かせた。サツキは目を閉じ、まるで眠っているようにも見える。
「……サツキちゃん？」
今度はやさしくポンと肩をたたくと、サツキは薄く目を開けた。
「……先生？　どうしたのですか？」
サツキは体を起こすと、先生のほうへと体を向ける。
「あなた、大丈夫？　気を失っていたけど」
先生が心配そうにそう言うと、サツキは不思議なことを言った。
「？　私が気を失っていた？　……面白い冗談ですね、先生」

先生はサツキの反応に目を見開くと、一つのことを決意する。
「サツキちゃん、カウンセリングを受けましょう？」
「……かうんせりんぐ？」
先生は柔らかく微笑んだ。
「あなた、殺されてしまってからちゃんとした治療、受けていないでしょう？」
「……治療など。私は、もうこうして元気に」
「心のほうは？」
ピクリと反応すると、サツキは先生から一歩、身を引いた。
「私をどうするつもりなの、先生」
「何もしないわ。お願い、カウンセリングを受けて」
サツキは首を振った。
「どうして？　別に、カウンセリングを受けることは何も、悪いことでもなければあなたが弱いからでもないのよ？　あなたみたいなことに巻き込まれたら、どんな人でも心に傷がついてしまう。だから、その傷を治すきっかけに」
「私は、何も問題ありません」
きっぱりと、サツキは言い切った。頑なな態度だったが、先生は怒らなかった。
「……サツキちゃん、わかって。あなたのためなの。怖いのはわ

かるけど、大丈夫よ。ここの先生は、信頼できるから」
「違う、そういうことじゃないの」
ふるふると、静かにサツキは首を振った。
「じゃあ、どうしてなの？」
「私は、たかが、殺されたくらいで……私の心は揺らぎません。……揺らぐわけにはいかないのです」
「……お兄ちゃんのために？」
サツキはそう言われて、虚を突かれたような表情をした。
「なぜ、そのことを？」
「いまどきお兄ちゃんのことを兄様って呼んでる子、いないよ？　よっぽど好きなんだな、って思っただけよ」
先生の言葉を聞いて、サツキは少しだけ張りつめていた気持ちを緩めた。
「ええ、私は、兄様のことを愛してるの」
「……そう。ねえ、サツキちゃん」
先生は、少しだけ次の言葉を言うのをためらった。騙す形になるのが嫌だったのだ。
「カウンセリングを受けよ？　そうすれば、きっとお兄ちゃんの負担も少なくなると思うな」
まさか、サツキが兄のためにすべてを捧げる覚悟を常日頃しているとは、先生も思わなかった。だから、ともすれば陳腐なまでの言

葉に、サツキはうなずいたのだ。兄を盾にとられれば、彼女には従う以外の選択肢は消える。

「……そう。じゃあ、先生、いろいろ連絡しておくから、今はゆっくりしていて。ね？」

先生はにっこりとほほ笑んで言った。サツキは複雑な表情をしてうなずくと、ベッドの上に横になった。彼女は目を閉じると、すぐに寝息を立て始めた。

「……問題は深刻ね」

流が常日頃言っていたことを、先生は思い出していた。サツキは傷が癒えきっていない。その傷ができたのがいつなのかは先生にはわからなかったが、それでも、できるだけその傷が癒えるように手伝いはするつもりだった。

先生は内線電話の受話器を上げると、カウンセリングの先生につないだ。

第二十話

放課後、ゴガツは一人で保健室までやってきていた。鞄を持って、けだるそうに保健室の扉をスライドさせる。その気楽さは妹がもうどこかへ行かないということがわかっているからこそのもので、もしサツキが死んだままだったら、彼はこんなふうに普段通りにふるまっていないだろう。

「こんちは、サツキがここにいるって流に聞いたんですけど」

「いらっしゃい、お兄ちゃん」

保健室の先生は執務机の丸椅子をくるりと回し、ゴガツのほうへ体を向けて言った。

「結構サツキと仲良くなったみたいっすね」

ゴガツは愛想笑いをしながら先生のほうへと歩いていく。

「いいや。まだまだよ。で、お兄ちゃんに少し話があるのだけど」

「なんすか？」

先生は真剣そのものの表情で、ゴガツに切り出した。

「妹さん、これからしばらくカウンセリングに通うことになったわ」

「……かう……？」

単語の意味が分からず、ゴガツは戸惑う。

「心の悩みを抱えた人たちが、その苦しみをどうやって和らげるか、相談するためのものよ」
「……サツキは、悩んでたんすか」
先生は首を振った。
「本人は、自覚はないわ。悩んではいたけれど、それは本質的な悩みじゃなかった」
「……どういうことっすか？」
ゴガツは話を聞きながら、何のことに対して言っているのかうすうす感づいていた。
「あなたの妹さん、ある言葉を聞くと、意識を落とすわね？」
「……それが、問題だと言うんすか？」
先生はうなずいた。
「そんなの、カウンセリングなんてやっても意味ない」
「やってみなきゃわかんないでしょ？」
どこか楽観を含んだ先生の言い方に、ゴガツは思わず叫んだ。
「先生は知らないから言えるんだ！」
ゴガツの叫びに、先生はあっけにとられる。
「……あいつは、両親が死んだってことに、耐えきれなかったんだ」

打って変わって静かに、ゴガツは口を開いた。

「あいつは、人一倍感情豊かで、敏感だった。頭も良かった。……それが全部災いした」

ゴガツは思いだす。サツキが今のようになる前のことを。快活で明るく、本当に聡明で。両親にもよく愛されていた。ゴガツだってそうだった。けれど、事故がそのすべてを奪った。

「あいつが弱いからじゃない。あいつは少しだけ敏感だっただけだ。だから、こうして……」

歯車が狂ったんだ。そうゴガツは言葉を絞り出した。

「あいつは戻らないよ、先生。もとに戻せる要因はもう十年前に……」

ゴガツは仇の顔を思い出して歯を食いしばった。ゴガツの中が殺意や敵意で満ちていく。思わず悪態をつぶやきそうになったゴガツは、ここに先生がいることを思い出した。

「……カウンセリングなんて、意味ねえよ」

はっとなったゴガツは、あわててそう付け足した。

「……そう」

先生が何かを言おうと口を開いたとき、部屋の奥で衣擦れの音がした。二人は音のしたほうを向いた。しばらくすると、頼りない足取りで黒い服で白い髪の、人形さながらの少女、サツキがゴガツの

ほうへと歩いてきた。

「兄様？」

「おう、サツキ。帰るぞ」

そっけなく、ゴガツは言った。

「わかりましたわ。兄様、今行きますわ」

よろよろと、サツキはゴガツに向かって歩き出す。ふと、彼女の足がもつれてバランスを崩した。

「サツキ！」

ゴガツはあわてて駆け寄り、サツキを支える。凍ったかのように冷たいサツキの体に、ゴガツの背筋に嫌な汗が流れる。

「サツキ、大丈夫か？」

「……はい、大丈夫ですわ。まだ、この体に慣れていないだけ……ですわ」

そう言いながら、サツキは先ほどまで感じてすらいなかった強い違和感に、酷く戸惑っていた。何が原因かは全く分からないが、うまく体が扱えない。

「おい、本当に大丈夫かよ？」

「……兄様、私のことを抱いてくだされば、この不和も治ると思うのですが」

「こんな時に冗談やめろ」

ふふふと、サツキは笑ったが、身体の違和感は消えなかった。

「兄妹でしちゃってるの？」

「やってない」

ゴガツはきっぱりと、心配そうな顔をして聞いてきた先生の言葉を否定した。

「ったく。行くぞ、サツキ」

「え、はい」

毒づくと、ゴガツはサツキに肩を貸して保健室を出ていった。口調は乱雑だったが、彼の足取りはサツキを気遣ったものだった。

「……ゴガツ君も、大変な子ね……」

先生はぴしゃりと閉じられた扉を見据えて、そういった。

第二十一話

「……なんで話したんだよ」

妙にくっついて歩くサツキに、ゴガツは聞いた。今二人は学校から家への帰り道。閑静な住宅街の中で、二人は歩いていた。周りに学生の姿がちらほら見受けられるが、やはり数は少ない。その中で、学生服に身を包んだゴガツと、黒い喪服のようなゴシック服に身を包んだサツキのすがたは異常に目立っていた。

「何のことですか？」

「なんで、先生に話したんだよ」

繊細な指を兄の服に絡ませながら、サツキは答えた。

「なぜでしょうか。……あの人なら、私の苦しみを理解してくれる……そう思ったから、なのでしょうか」

「……俺だって、わかってやれる。少なくとも、あいつよりは」

不思議なまでに自分を主張するゴガツに、サツキは不思議に思う。

「……兄様、珍しいですわね」

「何がだよ」

「兄様、嫉妬なさっているのですか？」

サツキの指摘に、ゴガツは顔を赤らめた。

「なっ……」

その顔は、指摘が図星だったからする羞恥の表情だった。

「ち、ちげえよ。いきなり俺ら二人の間に割って入られたようで……鬱陶しかったんだよ」

照れくさそうに言い訳を言うと、ゴガツは先を急いだ。あわてて、サツキは追従する。

「あ、待ってくださいな、兄様」

「……なんで服つかんでんだ？」

「怖いのです、兄様」

普段通りの口調で、サツキは言った。

「この道を歩くことが怖いのです、兄様。けれど兄様、私は兄様さえそばにいれば大丈夫です。こうして服をつかむことを、お許しいただけますか？」

人形のような顔は、少し不安の表情に彩られていた。

「好きにしろよ」

そんな妹のことを、ゴガツが無下にできるわけがなかった。

「ふふふ、ありがとうございますわ、兄様」

サツキはそう言って、心底安心したような笑みを浮かべたのだった。ゴガツにもっとすり寄り、幸せそうな笑みを浮かべていると。

「あの！」

後ろから、女の子の声が聞こえてきた。ゴガツとサツキは振り返った。彼らの後ろには、サツキが見知った親友、波中有栖がいた。

「アリス？」

「……お姉さん、どうして私の名前を？」

「私よ、アリス」

サツキはそう言って自己主張するが、親友は怪訝な顔を浮かべるばかりだ。

「何の用だ？」

「さ、サツキちゃんのお兄さんですよね！」

ゴガツの質問に答えず、確認するように聞いたアリス。

「ああ、そうだけど、何？」

「あの、サツキちゃん、その……亡くなったって、本当なんですか？」

ゴガツとサツキは言葉を詰まらせた。

「……どうして、そんなことを聞くんだ？　担任に、言われなかったか？」

「でも！　お葬式だって行けなかったし、担任の先生だって不思議そうな顔してたし、もしかしたらって！」

ゴガツは嘆息した。葬式という言葉に胸を痛めた自分が、情けなく思えたからだった。今はサツキが危ういんだから、俺がしっかりしないといけないってのに。そうゴガツは自分に言い聞かせる。

「サツキは死んだよ。それは事実だ」

その答えを聞いて、アリスは悲しそうに眉をゆがませた。

「そして」

ゴガツは彼女が泣き始める前に、サツキの背を押して、アリスのそばまで歩かせる。

「サツキは生き返った」

「……へ？」

驚いたのはアリスだけではなかった。急に背中を押されたサツキも、親友に対してどう振る舞えばいいのかわからず、戸惑っている。

「信じられねえか？」

「……」

アリスは肯定も否定もしなかった。

「で、でも、そんなこと……」

「ありえねえ、ってか？　まあ、仕方ねえわな。俺だって最初は信じれなかった。でも、まあ、しばらく話してみろよ。わかるから」

にこやかにゴガツはそう言った。

「……アリス、信じてくれる？」

「さ、サツキなの？」

半信半疑。嬉しさよりも戸惑いのほうが勝っているアリスに、サツキは静かに頷いた。

「で、でも、サツキ、サツキは、死んじゃったって……」

「大丈夫よ、アリス」

ぎゅっと、サツキはアリスを抱きしめた。冷たい感触が、アリスを包む。

「私の死を悼んでくれてありがとう。でも、必要ないわ。私はここに、いるんだから。ここに在るのだから」

「……サツキ」

温かい言葉とは裏腹に冷たい体を持つサツキに、アリスは少しだけ悲しくなった。目頭が熱くなった彼女は、サツキの体を抱きしめ返す。そうして、理解する。全然違う。全然違うけど、サツキだ。壊れ物を抱くようにする優しい抱きしめ方。こんなふうに抱きしめるのは、サツキだけだ。ああ、サツキは生き返ったんだ。理屈ではなく全身で、アリスはサツキの存在を認識した。

「……サツキ、冷たいよ」

「そう？　できるだけやさしく言ったつもりなんだけど」

「サツキの体、氷みたい」

少しだけ、サツキは衝撃を受けたような顔をした。

「……こんな私は、イヤ？」

アリスは首を振った。

「サツキが生きてるだけで……いいよ」

アリスは抱きしめる力を強くする。彼女はいなくなってしまった友達を、決して離すまいとするかのように、抱きしめる。

「ちょ、ちょっと、アリス。苦しい」

「あ、ご、ごめん」

アリスはあわてて、飛び退くようにサツキから離れた。ほとんど力を入れていなかったサツキの腕ははじかれ、二人の距離が空く。二人の間に、沈黙が流れる。

「……二人とも、もういいか？」

「あ、はい、兄様」

ゴガツに呼ばれ、サツキは兄のほうを向く。

「あ、サツキ！」

アリスは思わず呼び止める。サツキは振り返ってアリスのほうを見る。

「どうしたの？」

「え、えっと。サツキ、学校……また通えるよね？」

その問いに、サツキは首を振って答えた。

「私は、もう死人なの。少なくとも、社会的にはそう。……だから学校には……」

サツキはひどく苦しそうにアリスに言った。アリスは涙を一筋流すと、それをあわてて拭った。

「……さ、サツキが生きてるだけでうれしいよ。死んでないなら、いつでも会えるよね？」

サツキは笑顔でうなずいた。

「ええ。また、いつでも会おうよ」

サツキはそう言うと、兄のほうを向いて、歩き出した。

「じゃあね、アリス」

「う、うん」

最後にそういうと、サツキは兄を促した。

「行きましょう、兄様」

「いいのか？」

「ええ。いつでも会えるのですから」

ゴガツはその答えを聞くと、そうか、とだけ言って歩き出した。

「……」

アリスは二人が小さくなるまでずっと、その場で見送っていた。

第二十二話

眠りたい。家に帰ったサツキは、自身が強烈な睡魔に襲われていることを自覚した。

「兄様。すごく眠いのです。さっきも眠っていたのに……どうしたのでしょうか、私」

不安を兄に打ち明け、サツキは顔を伏せた。

「疲れてるんだろ、単純に。変わってすぐに順応なんてできるわけねえよ」

それどころか、サツキの不安はもっと根の深いものになるのかもしれない、とゴガツは感じていた。

「……いえ、大丈夫ですわ。私は、大丈夫です、兄様」

サツキはうつむいたままそう言った。無理することないのに。ゴガツはそう思った。人の死は重いものだ。それこそ、一生付きまとうほどに。

「そうか。まあ、疲れたんなら、眠れ」

「はい」

サツキは頷くと、ゾンビのような頼りない足取りで二階へと上がろうとした。

「サツキ、一緒に寝てやろうか？」

「え？　……いえ、結構ですわ。お気持ちだけ、いただいておきます」
「……そうか」
断られると思っていなかったのか、しょんぼりとした口調でゴガツは言った。よほど疲れているのか、サツキはそんな兄の様子にも気づかない。彼女は頼りない足取りのまま、二階へと上がっていった。それを見送ると、ゴガツは息を吐いた。
「……サツキ」
遠くに逝って、二度と会えないと思っていた彼女が、そばにいる。それは奇跡だった。けれど、ゴガツから見れば、サツキの心は深い闇に包まれているような気がしてならなかった。その闇を和らげてやりたいと思う一方で、彼にはその和らげ方がわからなかった。保健室の先生が言っていたように、カウンセリングを受けさせるべきなのだろうか。そう考えたところで、ゴガツは首を振った。そんなことをすればまるで、大事な妹を他人任せにしてしまうようじゃないか。兄としての責務を放棄したも同然だ。ゴガツはそう思った。
「……はあ」
けれど、妹の闇さえ理解できない自分に、何ができるのだろう。何をしてやれるのだろうか。そうゴガツが思い悩んでいると、リビングにある電話が激しい音を立てた。ゴガツはけだるそうに電話のそばまで行くと、受話器をとる。
「もしもし、三宅ですが」
「ゴガツか？」
「……流？」

ゴガツは電話の相手にいぶかしげな対応をした。なぜ、彼女が家の電話番号を知っているのだ。教えたことがないのに。

「何を不思議がる。私は魔法使いだぞ？」

「魔法で家の電話番号を知ったってのかよ？」

「何？　電話番号？」

ゴガツは会話のかみ合わなさを感じていた。

「……ゴガツ、キミはサツキから何も聞いていないのか？」

「何を聞くんだよ」

「そうか。わかった。サツキに代わってくれるか？」

「サツキは今寝てるよ」

ゴガツがそういうと、電話の向こうの彼女は意外そうな声を上げた。

「保健室で眠らなかったのか？」

「寝てたみたいだけど、眠いんだとさ。なんか心当たりあるか？」

「あるともさ」

至極当然のことのように、流は言った。

「なにが、原因なんだ？」

「まあ、はやる気持ちはわかる。が、物事には順序というものがある」

「何が言いたいんだよ？」

「サツキに話してから、教えてやる」

「俺が先じゃだめなのかよ？」

もちろんだ。と流はゴガツに返した。
「事は彼女自身にかかわることなのだ。おいそれと他人に教えてしまっては、私の信用にかかわる」
「家族だぞ？」
「親しき仲にも礼儀あり。筋は通すべきだと思うがな。それでも知りたいか？」
そこまで言われてなお知ろうとするほど、ゴガツは常識知らずではなかった。
「いや、いいよ。今はなんで電話番号知ってるのかだけ教えてくれ」
「ああ、それは簡単だ。お前の家にお邪魔させてもらったとき、警察から電話があったのは話したな？」
「ああ」
ゴガツはそこまで聞くと、そういえば葬式してないな、と思考の隅で考えた。
「そのとき、好奇心に駆られてな、電話機から電話番号を調べてしまったのだ」
「……そうかい」
心底あきれたような声をゴガツは発した。
「もう切るぞ」
「待ってくれ。すまないが、できるだけ早くサツキに私の携帯にかけるよう言っておいてくれ」
「電話番号なんて知らねえぞ？」

「君らのは着信履歴からかけられるだろう？　例の依頼、達成の報告だと彼女に伝えれば不審がることなくかけるだろう」
「……そうかい。じゃあな」

いろいろと聞きたいことはあったが、ゴガツは詳しくは聞かなかった。さきほど流にいろいろ言われたことが効いているのかもしれない。受話器を置くと、ゴガツはとりあえずサツキを起こしに二階へ上がった。

第二十三話

電話のコール音がサツキの耳を打つ。三コール目で、電話の相手と繋がった。兄に起こされてすぐ、あわてて彼女は電話まで走り、流へと電話を掛けたのだった。サツキの隣では、ゴガツが夕食の準備をしている。

「もしもし、流だが」
「……サダメ、さん」
「サツキか」

電話の相手は、短くサツキのことを呼んだ。

「例の依頼、完了だ」
「……どうだった、の？」

サツキは流にあることを頼んでいた。それは。

「君の予想通り、君を殺したのは間違いなく現在拘留中の嘉蓋一家だ」

サツキは目を伏せた。自分が思っていた通りだったことだ。けれど、やはりそれでも……覚悟していたこととはいえ辛かった。流はつとめて冷静に話しているが、その声は小さく、消え入りそうな声だった。彼女はやさしくサツキに問う。

「犯人を知って、君はどうするのだ？　復讐か？」

サツキは相手がそばにいないのにもかかわらず首を振った。

「違います。知りたいだけです。私を殺した人が誰なのか」
「そうか。私は、友達のためになら努力を惜しまない。復讐がしたくなったらいつでも言ってくれ。最高のシチュエーションを用意する」
「……どうして、そこまで……」

サツキは思わず聞いてしまった。なぜ彼女はこうまでして自分によくしてくれるのか。それがわからなかった。

「どうして、か？　私はまだ若く、世界も狭い。だから、犯人を調べている最中に知ったことが、私をそうさせるのだ。……感傷はいやか？」
「私は、別にいい……でも、知ったことって、なに？」

電話の向こうで息をのむ音がした。流が言いよどむなど、酷く珍しいことだった。

「私は家庭の事情でいろいろな人間に顔が利く。警察資料の入手なども、私には可能だ。……たやすくはなかったがな」

サツキは少しだけ疑問に思った。流は一体、何者なのだろうか、と。

「その警察資料の中でな、君の司法解剖の結果もあったよ」
「……」

サツキは頭の中が真っ白になった。自分の、司法解剖。分解された自分を想像して、彼女は口を押えた。

「君は非常に疲れたと思うことはないか？」
「……ある」
どうしてそんなことを今、この場で聞くのだろうか、と疑問に思いながらも、答える。
「何かに怯え、恐れる自分がいる、と感じることはあるか？」
「……ないことは、ないです」
サツキは台所に立つ兄を見やって言った。会話の内容が聞かれていたら、心配をかけてしまう。彼女の中に、兄が自分の電話を盗み聞きをされることに対する嫌悪感はなかった。
「そうか。君のそれら不調の原因は、およそ君の死にざまにあると、私は考える」
「どういう……意味？」
サツキは背中に汗が一筋流れるのを感じた。だめ、聞いてはいけない。でも聞かなきゃ何もわからない。止めなきゃ。でも聞かなきゃ。その二重の拘束が、彼女の口を重くする。サツキの静止がない流は、止まることなく、続きを話していく。
「君の遺体は、山に埋められていた。まだ右足の指が見つかっていない」
「……まさか」
嫌な想像をサツキはした。その驚きの声を、流は否定しなかった。
「そのまさかだ。君は解体され、山に埋められたのだ」
「それが私の不調と何が関係あるっていうの！」

思わず、サツキは叫んでいた。胸が苦しくなって、頭が痛くなって、電話口で、兄がそばにいるということも忘れてしまっていた。

「ようするに、君は自身の死が衝撃的過ぎて、君の心に多大な影響をもたらした。そういうことが言いたかったのだ」

「死んでからの処遇なんて、どうでもいい！　私はどうやって殺されたの！？」

「……死んでからの処遇では、ないのだ」

サツキは口をつぐんで青ざめた。まさか。そんな。頭の中で言葉がめぐる。

「犯人の嘉蓋は普段、普通に暮らしているただの前科者だ。だから、人の生死など、確認のしようがない。焦っていたら、特にな。……だから、気絶した君を山に連れて行って、そこで、気絶した君を」

「……もういい」

「そうか」

サツキはその場でへたり込んだ。生きたまま、バラバラにされた。その時、自分は痛みで目が覚めたかもしれない。もしそうだったなら、その時の記憶は、今も自分の中に埋もれている。その事実が恐ろしくなった。そのことを思い出したら、その時の痛みを思い出したら、自分はどうなってしまうのか。それを考えると怖くて怖くてたまらなかった。

「……本当に、サダメさんの調べたことが正しいの？」

「詳しい話は君の精神衛生上の都合から省くが、間違っている可能性もある。化学は絶対ではないからな」

「そう……。ねえ、サダメさん、生きたままバラバラにされるって、

どんな感じなんだろう」
「……」
流は押し黙った。
「ごめん、わかんないよね。でも私、怖いの、サダメさん。死んだときの記憶がないのが、怖いよ。流が消してくれたの？」
「……私は、そんなことできない」
「魔法使いなのに？」
「私は記憶の消し方など、知らないのだ。すまない」
「……そう。じゃあ、死んだときの記憶は、私が忘れてるんだね」
絶望をにじませて、サツキは言った。
「あ、ああ。そうなるな」
「……そっか。あとは私の問題、だよね。ありがとサダメさん。辛いこと、言わせちゃって」
最後にサツキは声だけでも明るく言うと、流の返事も聞かずに電話を切った。
「……サツキ、大丈夫か？」
「ええ、大丈夫ですわ兄様。私は何も問題はありません」
サツキはいつもと変わらぬ笑顔で、ゴガツに微笑みかけた。
「……なあ、サツキ」
「なんですか？」
「流からお前のこと、聞いてもいいか？」

サツキはためらいがちにもうなずいた。
「兄様がそう言うなら、構いません」
「そうか。ありが」
「でも」
サツキは申し訳なさそうにうつむいた。
「もし、全てを知っても……私を支えてくれますか？」
「もちろんだ」
ゴガツは力強くうなずいた。
「……では、兄様、私はこれで失礼します」
「どうした？」
「少し、考え事がしたいのです。構いませんか？」
ゴガツは不安になりながらも、頷いた。
「おう。辛くなったらいつでも言えよ。抱きしめるくらいは、してやるから」
「ふふふ、ありがとうございます。……では」
そういうと、サツキはゆっくりと二階へあがっていった。
「……サツキ」
その様子を見送ったゴガツは、料理を切りやめ、電話へと向かった。

第二十四話

再び、三宅家の電話の受話器が上げられた。ゴガツは神妙な面持ちで相手が出るまで待つ。

「……サツキ、どうした？」

電話の相手、流は三コールほどで出た。相手はサツキがかけなおしてきたと思っているようだった。

「流、俺だ。サツキからは許可はもらった。話してくれ」

「……そうか」

流は悲しそうに息を吐くと、しばらくした後に口を開いた。

「サツキを殺した犯人を捜していたのだ」

「やっぱ嘉蓋の野郎だったろ？」

「ああ。間違いなくな」

ゴガツは目に真っ赤な殺意を点らせた。自分はどうなってもいい、絶対にサツキの仇をとってやる。そんな思いで頭がいっぱいになった。

「ゴガツ。そんなことはどうでもいいのだ」

「んだと？　サツキを殺した犯人が、どうでもいい？」

ゴガツは眉をひそめた。

「ああ。重要なことはほかにある」

「あの野郎以外に重要なことなんてあるかよ？」
彼は不満と怒りをあらわにして聞いた。
「もちろんあるともさ」
「なんだってんだ？」
「君の妹、サツキ以外にほかはあるまい？」
ゴガツははっと、気づいたように目を見開き、口をつぐんだ。
「確かに悔しかろう、憎かろう。私とてゴガツと同じ気持ちだ。正直に言おう。今からでも飛び出して犯人を殺してやりたい。しかし、それはサツキの望むところではないのだ」
静かに、責めることなく、流はゴガツに言っていく。ゴガツも、サツキも、どちらも大切な友達だから。だから彼女は、今こそ慎重に言葉を紡ぐ。
「わかってくれ、ゴガツ。サツキは死んだ。そのことは彼女の心に大きな傷を残しているが、もう、過ぎたことだ。今ゴガツや私が復讐に行っても、彼女の傷をいたずらに広げるだけだ」
「……傷が、広がる？　そんなわけ、あるかよ」
「もし私が被害者から加害者に立場が一転すれば、どうにかなってしまうだろう。もしなんともなかったとしても、私はサツキにこれ以上辛い目に遭ってほしくない。お前にもだ」
ゴガツは何も言えなかった。兄である自分が復讐に燃え、目的を見失うところだった自分が恥ずかしくて、恥ずかしくて。
「ありがとう、流。俺、サツキのこと、全然わかってやれてなかっ

た。ただ闇雲にあいつを殺すことだけ考えて……」
「当然の反応だ。間違っているわけではない今はこうして冷静に話しているが、私だって、あと一人親しい誰かが殺されたら、まともに物を考えられなくなって、ただ復讐の鬼になるかもしれないのだから」

遠回しな励ましが、ゴガツの胸に静かに届く。彼はふっと柔らかく笑むと、少しだけ明るい調子を取り戻していった。

「ありがとな、流。いろいろ助かった」
「うむ？　それならよいのだが」

急に元気になったゴガツに少し戸惑う様子を見せる流。電話口の向こうにいる彼女は、そのあと短く嬉しそうに息を吐いた。

「何はともあれ、犯人はすでに捕まっている。もう君たち兄妹を傷つけるものは誰もいない」
「……そうだな」

不安がないわけではない。出所してきたらどうするのか、そもそも本当に罪が確定するのか。けれど、それらはすべて、子供の彼らには動かしようのない事柄だった。

「サツキをこれからもよろしくな、流」
「何を水臭い。私は私である限り、君たち兄妹の友人だ」

断言しないところも、流らしいとゴガツは思った。

「……俺、視野が狭くなってたな」

ゴガツはつぶやくように言った。カウンセリングを受けさせるということは、兄としての役目を放棄したようなもの。そう考えていた。

「そうか。だが、問題はあるまい。今、視野が広くなったのなら」
「本当にそう思ってるのか？」
「もちろんだとも。私たちはまだまだ子供。迷うことも間違うこともあるだろう？」

変にわかったような口を利く流が、妙におかしくて、ゴガツは口の端を広げて微笑んだ。

「ほんと、お前は変な奴だな」
「魔法使いなのだ。常人と同じであるほうが異常だ」
「ほんと、ありがとうな」
「気にするな。……なんだか、決意したような口ぶりだな？」

そう聞かれて、ゴガツはああ、と返した。

「流。俺、サツキにカウンセリング受けさせるよ」
「そうか。人の死は、私たちには重すぎるからな。それが正しいだろう」

予想通り、流はゴガツの考えを肯定してくれた。それが、彼にはとてもうれしかった。自分が、少し兄らしくなったようで。

「……不思議なもんだな、流」
「何がだ？」
「俺、あいつにカウンセリングを受けさせることは、兄としての役目を捨てることだ、ってついさっきまで考えてた」

流は黙っていた。何か思うところがあるのだろうか、とゴガツは推測したが、構わず続ける。

「でも、今カウンセリングを受けさせる、って決めた時……。なぜか、前よりもっと、兄としての役目を果たせる、って思えたんだ。どうしてだろうな」

「私には、兄弟姉妹がいないからわからない。だが……兄としての役目とは、妹のためを想うことだと私は思う」「……そういうことか」

ゴガツはストンと、今までわからなかったことが腑に落ちたような感覚がした。カウンセリングを受けさせない、と考えたのは、自分の都合。けれど、受けさせる、と決断したのはサツキを想ってのこと。

「はは、自分が兄でいるために、サツキに苦労をかけるところだったよ」

「気づけたのなら、何よりだ」

電話口の流は、微笑んでいるような気がした。ゴガツはもう一度笑うと、少しだけ耳から受話器を離す。

「重ね重ね、ありがとうな、流。また明日」

「そうだな、また明日」

何気ない別れの言葉が、無性にほほえましく思えて、笑顔のまま、ゴガツは受話器を置いた。

「……よし」

料理を作って、サツキを起こして、そして寝る準備をして。それからは、明日に備えて眠ろう。たとえ悪夢を見ても、それは夢で。現実は、違うから。

今までの陰鬱とした気持ちはどこかへと去って、ゴガツの中にはさわやかな風が吹いていた。きっと、俺とサツキはこれからだ。これから、幸せになれる。どこかでそう確信した。

ゴガツは再び台所へと向かうと、鼻歌を歌いながら料理に取り掛かった。こんなふうに楽しい気分で料理をするのは、幾分が久しぶりの事だった。

第二十五話

ゴガツはサツキと一緒に食事をとっていた。二人はテーブルに向かい合わせに座り、そこの上に乗せた料理をサツキは陰鬱そうな顔でほおばっている。しばらく目を閉じ、一度うなずくと、ゴガツは口を開いた。

「サツキ」
「はい、なんですか兄様」

箸でつまんだ野菜を口に運ぶ手を止め、サツキはゴガツの目を見た。

「カウンセリングの話……なんだがな」
「はい」
「サツキは……どう思ってる？」

サツキはしばらく首を傾げたり顎に手を当てたりしながら思案し、口を開いた。

「どう……とは？」
「だから、サツキとしてはカウンセリングを受けるということに対してどう考えてるんだ？」
「……どうなのでしょう？　深く考えていませんでした」
「そうか」

ゴガツは短く言った。なんだか拍子抜けしたような、そんな感覚に見舞われた。

「それならいいんだ」
「兄様？　どうかいたしたのでしょうか？」
サツキは不思議そうな顔をした。
「俺は……最初、保健の先生から話を聞いたとき、反対だった」
「そうですか、なら」
言葉の続きを、ゴガツは手で制した。
「でも、今は違う。今は、自信を持って言える。大丈夫だから、安心して受けてこい。な？」
ぽかんと、サツキは目を見開いた。
「……兄様」
サツキはくすくすと笑った。
「変な兄様。……でも、ありがとうございますわ」
そうお礼を言うと、サツキは何かを言いたそうな顔をした。
「……なにか言いたいことがあるのか？」
「兄様。私、一つだけ、決めたことがあるのです。聞いていただけますか」
ゴガツは当然だとでもいうようにうなずいた。ほっとしたような顔を浮かべると、サツキは意を決して話し始める。

「私、ずっと悩んでいたのですが……」
「何をだ？」
「私が殺されてしまったということを、どう受け入れるのか、をです」

ゴガツは息をのんだ。自分はもう決めた。サツキも決めた。ゴガツは決めたことを伝えた。今度はサツキの答えを聞く番だ。そう思った。願わくば、同じ方向を見ていることを。

「私は……どうやら、生きたまま、解体されたようです」
「……」

ゴガツは痛ましげに眉をひそめた。

「しかし、その記憶は私にはありません。できることなら、目覚めることなく逝けたと信じていたいのですが、そうでない可能性もあります。もしそうなら、地獄の痛みが私の中に眠っていることになります」
「……そうだな」

何を言うべきか、さんざん悩んだ末、ゴガツは相槌を打つことしかできなかった。

「ですが、私は気にしないことにしました。忘れたままにすることにしました」
「……」

まだいうことがあるのだろうか？　ゴガツはそんな気持ちを込めて、サツキに視線を送る。

「私は、死にました。けれど今は生きています。過去にとらわれて、過去が襲ってくるかもしれないと恐れ、何もできなくなったのでは生き返った意味がありません。私は、忘れたままにします。辛い記憶を忘却の彼方に追いやって、死んだという事実だけを覚えたまま、生きていきます。……ダメでしょうか？」

ゴガツは首を振った。

「そんなことはない。辛いことを無理やり思い出す必要なんかないんだ。俺は、お前が幸せには幸せでいてほしいんだ。だから」

ゴガツに不安があった。もしサツキがすべてを思い出してしまったら、どうするのだろう。それを聞くべきなのか、否か。答えは、なかなか見えない。

「……だから、お前は自分の信じる道を行け。俺は、お前を支えていくから」

思い出した時のことを考えているのかもしれない。考えていないのかもしれない。どちらにせよ、どちらだったにせよ、ゴガツは自分がやることに変わりはないのだ。だから、ゴガツはそう伝えるだけにとどめた。

「ふふふ、ありがとうございますわ、愛しい兄様」

「気にすんな。サツキ」

ゴガツとサツキはほほえみあった。ゴガツはこれからうまくいくと思っていた。サツキは、未来に希望を見出していた。それはすべて、お互いがいたから。これからも、お互いがいるなら乗り越えていけるだろう。

「……昔のことは忘れて、な」

ゴガツは薄く笑んだ。今までサツキが両親のことを忘れてしまっていることを一大事だと考え、何とかしなければと思っていたが、そんな必要はないのだ。彼はそう気づいた。確かに、普通とは大きく外れ、知らない人が見ればいびつに見えるだろう。けれど、それは必要なことなのだ。必要だから、忘れたのだ。きっとサツキも、受け入れる準備ができたら思い出すのだろう。すべてを、少しずつ。

「……兄様？」

「あ、いや、なんでもない。きにすんな。さ、飯食ったら風呂入って寝るぞ」

「はい」

サツキは朗らかに笑って、食事の続きを始めた。

まだたくさん辛いことはあるだろう。でも。

ゴガツは嬉しそうに息を吐くと、サツキと同じように食事を再開した。

最終話

兄妹が決断して、しばらくの時が経った。逢坂市の朝はいつの日も変わらずやってくる。

三宅家では、朝早くに起きたゴガツが、妹を起こすところから一日は始まる。彼は、隣で眠っているサツキの肩を揺さぶった。

「おーい、起きろよ、サツキ」

「……はい、兄様」

眠たげな顔をして、サツキが上半身を起こす。

「おはようございます、兄様。今日もよいお天気ですね」

「くもりだけどな」

「兄様がいるなら、いかような天気でも、よいお天気なのです」

ゴガツは肩をすくませると、布団から出て立ち上がった。

「さ、とっとと体起こせ。学校ないからって、だらだらするなよ？」

「わかっていますわ、兄様」

サツキは生き返ってからしばらく、カウンセリングに通うことになった。しかし、サツキが社会的に死んでいるのは変わりようがないことなので、学校に行くことはできない。しかし、学校に行っていないことを除けば、サツキは生前の生活を取り戻していた。

未だに、両親のことを聞けば意識が途切れてしまう。だがそれをゴガツは憂慮していなかった。いつか、きっと。楽観にも誓い感覚で、彼はサツキを見守っている。

「兄様、相談があるのですが」
兄の後ろに続いて階段を下りていたサツキが、神妙に言った。
「どうした？」
ゴガツはリビングまで行くと、朝食の準備を始める。パンを冷蔵庫から出し、トースターに入れる。
「私、アルバイトをしてみたいのです」
「バイトか……」
「日中やることもなくテレビを見ているのは正しいことではないような気がしまして。生活も最近きつくなってきましたし、ちょうど良い機会かと」
「……そうだな」

サツキを殺した犯人、嘉蓋一家は罪が確定した。子供達は罪に問われなかったが、その両親は有罪が決まり、無期懲役が決定した。
だが、それによって兄弟は経済的に困ったことになってしまった。幸い、国からいくらか補助金が出ているが、それでは毎日生活するのがやっと。
「いけませんでしょうか」
「いや、俺も考えててな。時間どうするか、って思ってたんだが……」
ゴガツも、サツキと同じように、アルバイトをすることを考えていた。しかし、二人が不自由なく暮らせるようになるには、かなり働く必要がある。高校に通う彼に、そのような時間は取れなかった。

「なら、一緒に働きましょう、兄様」
「そうだな」

サツキの言葉を聞いて、ゴガツは彼女の変化を感じ取った。もし事件のすぐにこの話が出ていたなら、一人で頑張る、などと言っただろう。そうしないようになったのは、なぜだろうか。ゴガツは考えるが、答えは見えてこなかった。

「働き先は私が探しておきますわ。別々にいたしましょうか？」
「まあ、そこはサツキの好きにしろよ」
「はい」

そういうと彼女は花のように朗らかに笑った。生き返ったサツキに人形のような印象を受けていたゴガツだったが、最近のサツキを見ていると、前のサツキに戻ったような、そんな印象を受ける。最初よりも、さらにサツキが生き返ったことを実感していた。

「……具体的にどれくらい稼げばいいんだろうな、俺ら」
「そうですわね、国からのお金が月五万円から七万円ですから、月十万円から二十万円ほど稼ぐ必要があるかと思います」
「大変だな」

トースターに入れたパンが焼けると、ゴガツは皿をとろうとするが、サツキが二人分の皿を差し出してきたので、それを受け取って、パンを皿の上に乗せる。それをテーブルの上に置くと、ゴガツは椅子に座った。サツキも、兄の正面に座る。

「ええ。ですが、私と兄様が分担すれば、半分で済みます。ですから、きっと大丈夫です」
「まあ、そうだな」

ゴガツはパンをかじる。サツキははっと気づいたように冷蔵庫に向かった。

「兄様、マーガリンはいりますか？」

「いや、いいよ」

「味気ないのではないですか？」

「ん～。俺、パンの素朴な味、好きだから」

「そうですか」

サツキは冷蔵庫からマーガリンをとり、それを自分のパンに塗った。

「……そうだ、その体には慣れたか？」

その動作があまりに自然なので、ゴガツは思わず聞いてしまった。かつて、まるで機械のようにぎくしゃくとしていたサツキだが、今はかつての動きを取り戻している。

「はい、おかげさまで。メイ先生と兄様のおかげですわ。ああ、それとサダメさんも」

「そうか、何よりだ」

カウンセリングの先生と自分の名前が同列に出てきて、ゴガツは少しだけ嬉しくなった。自分はカウンセリングなんてできない。けれど、サツキの役に立っている。サツキを支えられている。そう思うと、とても誇らしくなってくるのだ。

「お前、最近あいつと会ってるのか？」

「はい、保健室で時々」

「時々？　あいつ今でも保健室に入りびたりだぞ？」
「私が、時々にしか保健室に行きませんので」
「ああ、なるほど」

サツキを生き返らせた魔法使い、流≪ながる≫運≪さだめ≫は今でも、変わらずサツキのことを気にかけていた。昌の説得にも力を入れてくれている。未だに彼はサツキを身代わりだ思っているのだ。それでもいいとゴガツは思っているのだが、流はそうは思っていないようだった。今でも、ときどき身代わりだ身代わりじゃないと、不毛な言い合いを繰り広げている。

「あ、兄様、もう時間ですわよ？」

考え込んでいるゴガツにサツキはそういった。

「え？　あ！？　しまった、話しこんじゃったな」

ゴガツはあわててパンを口に押し込むと、洗面台に駆け込んだ。

「兄様、急いで食べると喉に詰まらせますわよ？」
「らいじょうぶ！」

しばらくすると、洗面台から歯を磨く音が聞こえてくる。その音を聞きながら、サツキは薄く笑った。

「……なんだか、この日常がとても美しく思えますわ」
「ん？　らんかいっはか、さるき？」
「いえ、なんでもありませんわ」

彼女は笑うと、二階の寝室まで行き、二人の枕元に置いてあった

ゴガツの鞄をとった。大事そうに抱えて降りると、服を着替えたゴガツが二階に上がろうとしているところだった。

「兄様、鞄ですわ」
「おお、ありがと。じゃ、行ってくる！」
「はい、行ってらっしゃいませ」

あわてて靴を履いて出て行ったゴガツを見送ったサツキは、その場で顎に手を当てて、何かを思案する。
しばらくして、彼女は口を開いた。

「まずは求人雑誌だよね。それから、今日はカウンセリングあったかな？　……サダメにも会いたいし、学校行こうかな？　どうしようっかな……。ま、いっか」

いろいろと悩みながら、彼女は服を着替えに二階に上がった。
その足取りは軽やかで、雰囲気もかつての陰鬱さは見られなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2988o/

兄妹の想い

2011年10月2日09時52分発行